

79
483

法學博士 戶水寬人 序
無聲菴 里見常次郎 著



東京 寶文館發行 大坂

179-483

陽明と禪序

余が學友無聲菴里見君は實學篤行の人として余の畏敬す
 たる而已ならず其心性の學に通曉せらるゝは亦余の敬慕す
 所なり頃者陽明と禪と謂へる書物を書き而して余に一讀を
 せしめ且つ異見あらば遠慮なく批評を加ふるを以てせられたり、
 余は氏が書ける是等の書は氏の委囑なくとも進んで讀まんと
 欲する所なるを以て公私の事共に入り交り居るをも顧みず直
 に採つて以て讀み始む而して知らず識らずの中に、一息に讀み
 終れり讀み了つて唯耿耿たる心光四表に光被するの想あるの
 み抑も此書たる世に灼灼の聞へある彼の王陽明の思想觀念の
 基く所は何邊にあるかを見んと欲して遂に其基本の禪にある

明治 24
 所 24
 内交

明治
 27 12 24
 内交

ものたることを看破せられたるより出づるもの、夫れ或は然り、然れども陽明學と謂ひ、禪學と謂ふ、元と是れ吾人人類の精靈が如何なるものにて、如何に觀念せば人生の能事盡せりやを明らかにせんことを、目的とせるもの、其事たる言ふべくして行ひ易からず、解すべくして悟り易からざる理の樞府なり、故を以て、氏が兩者の契合點を見出すに付ても、其長短大小を比較し、其眞意を得るに於て、如何に苦心焦慮せられたるやを、想像するに難からず、是に於てか知る、氏の望みの如く、遠慮なく批評を加へんと欲せば、固より兩者の奧義を研鑽玩味し、徐ろに靜思したる後にあらざれば、筆を下す能はざることを、且つ顧みるに余は余の思ふ如く、批評を加へ得たりとするも、是れ固より此書の眞價の輕重に關係あることにもあらず、之を以て、余は其批評を暫く後日

二期することゝなしたり、然れども世の苟も人生問題に心を止め、迷悟聖凡の消息を知らんと欲するものは、先づ此書を熟讀玩味せば、蓋し少なからざる利益あらん、當今の社會は、身の爲めに心を賣り、身を以て心を使ふて、尙ほ當然の事として怪まざる輩多き、世の有様、此間に於て本書の如き、人をして明月堂前風颯颯の想ひあらしむ、或は一方、亦社會改良の旨趣にも適せんか、

明治三十七年十二月

戸水寛人識

陽明と禪

第一編 總論

第一項	序說	一
第二項	佛教	三
第三項	禪の教理	八
(甲)	心法	
(乙)	事理ノ二法	
(丙)	真俗二諦	
(丁)	真俗相關	
(丁)	坐禪	
第四項	陽明學說の由來	二六
(甲)	程明道	
(乙)	程伊川	
(丙)	程明以后ノ學	
(丁)	陸象山	
第五項	宋明の二大思潮	三一
第六項	陽明教と佛教	三三

第二編 心論

- 第一項 王學根本の觀念……………四〇
- 第二項 陽明の心の觀念……………四五
- 第三項 陽明の良知の觀念……………五六
 - (甲) 内延的良知
 - (乙) 外延的良知
- 第四項 良知と禪の本來の面目……………六五
- 第五項 王禪の不投合……………六九

付録 坂本塞源論

第三編 修養論

- 第一項 序説……………八三
- 第二項 知行合一の基因……………八八
- 第三項 知行合一の觀念……………八九

第四項 知行合一と一元論……………九三

第五項 陽明の知行と禪の心性の活動……………九五

第六項 知行合一と坐禪……………一〇一

第四編 死生觀

第一項 儒學の死生觀……………一〇八

第二項 陽明の死生觀と禪の死生觀……………一二四

例言三則

一 宋儒道學勃興の一大導火線は、佛教の流行せるにあることは、學者の共に認むる所故に宋以來の學者は、多少佛教の感化を受けざるものなしと云ふも不可なし、然れども其中、厚薄あり、而して象山陽明の如きは、其最も感化の厚きものなり、本書は此感化の厚き陽明に付て、佛教の何れに私淑したりしやを述べたるものなり、

二 本書の期する所は、千歲朽ちざる、陽明の心意思想を抽象し來り、其基く所禪にあることを證明し、以て世の陽明の心志を慕ひ、佛禪の修養に志あるものをして、聊か益する所あらんことを願ふの、微意に出づ、

三 筆を執るに當り、成るべく解し易からんことを期したりと雖、書中引文多きため、多少の困難を増せしならん、然れども幸に精讀の勞を假されんことを望む、

明治三十七年十二月

著者識

陽明と禪

第一編

總論

第一項 序説

禪は佛教に屬し陽明は儒學に屬す、禪は佛釋迦の提唱する所に係り陽明は孔孟の主張せる道德論に淵源す、一は宗教にして一は實踐的道德論なり、其根據斯の如くなるを以て其採る所の理論も亦自ら相去り相距たらざるを得ざるなり、然れども世の所謂哲學と云ひ宗教と云ひ倫理道德と云ふ、皆な其淵源を尋ねれば、吾人人類が宇宙に對し同類に對して起ることあるべき關係を探究し、調理し、身神をして遺憾なからしむるを目的とせるに外ならず、故に佛教と云ひ耶蘇教と云ひ、或は儒道、

里見常次郎著

歌道、神道、武士道など云ふも、各其主張する論理は異なれども、其最終の目的とする所は、吾人人類が宇宙に對し、同類に對して起ることあるべき關係を調理し融和せしむる原理原則、或は其方法手段を講究探査するに外ならず、之を以て前述の禪と儒學殊に陽明派儒學との關係に付ても、全く相去り相異りたるものにあらざるなり、加之、素と此陽明は佛教に心酔したる歴史を有する人なるを以て、其採る所の議論も亦他の一般儒學者と其趣を異にし、其根本思想に至りては、佛教と殆んど異なる所なきが如く思意せらる、故に適當に之を評せば、陽明の儒學は儒を加味したる佛學、或は禪學と云ふも、敢て不可なりと謂ふを得ざるなり、

陽明の學説は、儒學を加味したる佛學、或は禪學の如きものなることは、本篇の終局に至りて明亮となるべきも、今其全然相同じき點を指摘すれば、其根本の觀念たる、心を以て理の本體となすこと、心外に於て理を求めざること、實行を主として言語文字の末に涉るを排斥することに至りては、全く禪と相一致す、唯其彼が説く所の言語文字は、禪に使用する文字を避けて、専ら儒學常用の文字を使用せるの一點は、人をして禪と全然別物なるが如き感想を與ふるも、其真意に至りては禪意を採り

て之を儒學に符合せしめたるに外ならざるなり、而して彼は禪よりも一層實行の點に重きを置きたり、此點は彼が學説の他の儒學に一步を進めたる點なるのみならず、禪に對しても稍異色あるは蓋し此點なりとす、右の如く陽明の儒學は、佛教殊に禪と密接の關係あるを以て、余は今陽明の儒學と佛禪の契合點を説かんとするに當り準備として左に佛教殊に禪に付て、聊か説明の勞を採らんと欲す、

第二項 佛教

佛教とは釋迦の宇宙觀及び人生觀の總稱にして、三千年前印度に於て唱へられたる所に係り、其説門多様なり、其説門多様なるは人の智識の程度に對して、各其機に適したる法を授けたるによる、孔子が七十子に對して、各其長所短所或は機を見て變に應じ其説き方一様ならざると一般なり、而して釋迦滅後年所を経るに從て多數の學者釋迦の意を迎へて自己の説明を試み、或は南印度地方より北印度地方に移り、又西域を経て支那に涉るに及び、言語、風俗、習慣の異なるに從て、其間祖述の誤解あるのみならず、甚だしきに至りては付加抹殺の跡なき能はずして、遂に其法門

の多數なる所謂八萬四千と云ふに至れり、是れ獨り佛教のみならず如何なる學問と雖も、當初の單一なるは之を永遠に持續する能はず、年所を経るに従ひ、益々複雑多數となるは數の免かれざる所、事物發達の順序に於て當然起生すべき事實にして、言を換へて云へば、事物は是等の變化を経ざれば發達せざるものと云ふも敢て不可なきなり、

然らば右の如く多數なる佛教を如何に分類すべきか、又如何に佛教と佛教にあらざるものとを區別すべきか、

第一問に對しては之を形式の上より區別するは甚困難なるのみならず、遺漏なく之を數へんとすれば其煩に堪へざるなり、故を以て余は今古來より襲用し來りし實質的區別法に従ひて聊か述ぶる所あらんとす、即ち(一)大小乘二教、佛教の目的とする真理に對しては異なる所なしと雖、自利のみありて利他の缺如せるものを小乘佛教となし、自利と併せて利他をも乘運するものを大乘佛教となす、(二)漸頓二教、又其真理に到達するに漸次修行して累進的に功を積み、煩惱を斷じて真理を證得する方法に依るものを漸教と稱し、之に反して煩惱即菩提、生死即涅槃、即身

成佛と謂ひて、真理を悟得するときは其身其儘佛或は菩薩にして、他に修行を借るを要せずと立つるものを頓教と稱す、(三)顯密二教、又佛教の真理を現實に言ひ顯はし人々の根機に應じて其法を立つるものを顯教となし、之に反して其真理を秘密となし外方より容易に知り難きものを密教となす、(四)聖淨二教、又諸大乘中に於て、吾人が此宇宙に生存中、修行忍耐して諸種の惑ひを解き、佛教の真理を證得すれば現世に佛果を開き、佛菩薩に至ることを得と云へるものを聖道門と名け、之に反して此宇宙間に生存中は、此社會の羈絆のために淨行法心を得ず、然りと雖も、如説の如く發願すれば死後は安樂淨土に生れて、佛果を得べしと説くものを淨土門と名く、以上大小乘、漸頓、顯密、聖淨の四種の區別は、尙ほ之を論理的區別なりと謂ふを得ず、故に相互に交叉重用せらるゝを免れず、假令ば一群の羊を區別するに當り、第一に雌雄を以て區別し、第二に毛色を以て區別し、第三に年齢或は大小に依りて區別するが如し、其精細に至りては尙ほ諸種の區別を設けざるを得ずと雖も、之を茲に説くの餘地なし、兎も角此四種の區別に依りて佛教全體を包含するものと見て誤りなし、

第二問に對しては法門無量各宗各派其教理を異にし、殆んど佛教なるものは如何なるものなりやを知るに苦む、然れども同じく佛教と稱する以上は、其間に同一思想の一貫したるものなかる可からず、开は蓋し佛教と稱する以上は、釋迦の所立に基かざるを得ず、釋迦一代の說法亦無數なりと雖も其終極の目的は、宇宙形成の原理を發見し人生の歸局する所を知るにありて、縦横の論殆んど人をして其真意の那邊に在るやを知るに苦ましむるものありと雖、大小百川の水、遂に海に注がざるものなきが如し、而して其終極の目的は、即ち釋迦の涅槃觀なり、涅槃觀とは即ち釋迦の宇宙及び人生に對する真理觀なり、或は又圓寂とも滅度とも眞如或は法性と稱す、畢竟宇宙或は人生の最局優大の真理を示せるに外ならずして、換言すれば宇宙の真理を悟り人生の忘想忘念忘執、罪惡苦痛憂悶等の總ての厭ふべきものを解脱して、皆無に歸せしめ常住不變不退の樂境に安住する所に於て、涅槃と謂へる名稱を付するなり、之を或は眞如の道理に體達せる佛或は菩薩とも名くるなり、斯の如く釋迦の說法多數なるも、其最局の目的は涅槃或は眞如に體達するにあるを以て、釋迦の何れの教説を以て宗派を立つと雖も、終局は涅槃或は眞如に歸せざる

を得ず、故に佛教多數なれども、其同一思想の相貫通する所は其終局の目的涅槃或は眞如に歸するに在り、即ち涅槃或は眞如は佛教の大流なり、中樞なり、各宗各派は其支流なり、支流にして本流に注がざるものあることなきと同時に、苟も佛教なる冠詞の下に宗派を立つるもの、其終局の目的とする所は遂に涅槃或は眞如の淵藪に歸著せざるものあることなし、若し其最局の目的涅槃或は眞如にあらざるときは、是れ佛教と謂ふを得ざるなり、

右陳ぶる所によりて佛教の目的、涅槃或は眞如の道理に體達するにあることは之を知ることを得べし、然れども元來此涅槃或は眞如とは、無始無終不生不滅の無名相にして、名言を以て説く可からず、形状を以て示す可からず、畢竟無漏圓滿の知にあらざれば證得するを得ざるものとす、斯る意味深き道理を僅か一二の文字を以て言ひ現はすことは、甚だ困難なるを以て、其異名異譯甚だ多し、今其比較的恰當の文字なりと思考するものを擧ぐれば、

滅度、佛性、實相、一如、法性、不變異性、平等性、虛空界、法界、聖果、
無關、無間、勝、尊、

右等の名稱は其數殆んど數ふるに遑あらず、大涅槃經には二十五の異名を擧げ、四諦經には六十八の異名を付し、大乘義章には二十、法華玄義には十四、列子義林章には十四の異名を付せり、斯の如く異名異譯の多き、以て其意味の名言形狀の明示す可からざる所以を知るに足るべし、而して佛教と云ふも畢竟此涅槃或は眞如の眞理を説明し、證得するに外ならざるを以て、茲に能く右の道理を説明するを適當と信すれども、是れ能く本書の及ぶ處にあらず、

眞如をば如何なるものと人間は、墨書に書きし松風の音

第三項 禪の教理

(甲) 心法、禪宗に於ては他の各宗と異にして、佛教の正系を得たるものなり、即ち教外別傳と稱す、开は釋迦と迦葉との間に拈華破顔微笑の間に授受せられたる、佛教極意の心法なるが故に、他の各宗と其由來を異にすと云ふにあり、而して其心法とは何ぞや、即ち一言を以て之を云へば、釋迦の涅槃觀に外ならず、即ち釋迦が靈鷲山に百方の群衆に對し法を説く、終りに至り釋尊無言唯、華を拈る、大衆其意を解せずして茫然たり、獨り迦葉其意を解するもの、如く、破顔微笑す、茲に於て

釋尊、迦葉に向ひて曰く、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相微妙法門、今付囑於汝、當護持と云へるもの、是れなり、然らば其涅槃觀とは何ぞや、即ち前にも云へる如く、釋迦の終局究理の竿頭に達せる眞理觀に外ならず、畢竟大乘佛法に於ける眞如、或は法性と云へるものに外ならざるなり、

又此宗に於て不立文字と稱するは、是れ右に述べたる心法即ち眞如の理を教文によらず心を以て心に傳へ、言語文字を離れて、直に心源を指して成佛せしむるの方法を尊び、文字を鄙み精神を主とするの意よりして、文字を立せずと謂へるなり、然れども文字によらざれば其精神を傳ふる能はず、故に如何なる耆宿、老師と雖、皆な文字の上に其宗意を現はすを常とす、之を以て宗通說通の名稱あり、要するに方便の文字に執拗して、自家の主旨を誤認す可からずと云ふに在るなり、

(乙) 理事の二法、涅槃、即ち眞如とは、畢竟事、理の二法に外ならず、佛教全體を通じて其眞理を求むるも、畢竟事、理の二法を出でず、而して眞理を究むる方を眞諦と稱し、事相を究むる方を俗諦と稱す、大乘玄義に此二諦のことを説て曰く、二諦は是れ佛法の根本、如來の自行化他、皆由二諦と、事理の二法は、佛法の根本なり、故に如

來が自ら真理の上に安心し、天上天下唯我獨尊底の位置に坐して、他を善化する
こと即ち世を利し人を化せしむること、皆な事理の二法を悟得したる結果にし
て、亦之を一般に普及して其真理を證得せしめんとするに外ならざるなり、

(丙) 真俗二諦、真諦とは真如の原理自體を指し、俗諦とは真如の原理が隨緣して宇
宙萬物となるの道理を指す、平たく云へば、真諦とは、宇宙萬物有情無情に遍滿す
る根本の原理にして、俗諦とは世俗現實界の森羅萬象事相の差別が順序能く運
行して少しも停滯せざる當體の道理を云ふ、然れども此二者は元と異物にあら
ずして同物の異名なり、故に真理は其名の爲めに左右せらるゝものにあらずし
て假令ば真理を月とすれば、真俗二諦は之を指示する指の如し、指を用ひざれば
月を見るを得ざると同じく、真俗二諦によらざれば真如の道理を解得するを得
ざるなり、故に真理は二諦以上に卓越するものにして、言語を容れず文字を許さ
ざるなり、

(丁) 真俗相關、然れども斯る名目ある以上は、其名目に拘はりて真理を失ふに至る
は普通一般の状態なるを以て、此真俗二諦を一打して真理自體を直指するの方

法を立つ、之を真俗相關、或は二諦相依と云ふ、前に述べたる如く、真諦は宇宙混沌
事相萬差の淵源に屬する原理なれば、假りに之を空と稱す、俗諦は萬物參差彼我
對待の實相、即ち現相なれば假りに之を有と稱す、茲に於て其空なるものを抽象
し來り、其性質を研究するに、空而已存在するを得ずして、有ありて初めて空あり、
有なくしては何ぞ空を想像するを得ん、然らば即ち空と云ふも、有ありての空な
りと云はざるを得ず、之と同じく、有も亦空ありての有にして、空なくんば何ぞ有
を想像するを得ん、然らば即ち有と云ふも、空ありての有なりと云はざるを得ず、
果して然りし以上は、空は有に對する空にして、空と云へば必ず有を離れずして、
必ず有を意味せざるを得ず、有を離れず有を意味する空なれば、其空は非空の空
と云はざるを得ず、有も亦空に對する有にして、有と云へば空を離れずして、必ず
空を意味せざるを得ず、空を離れず空を意味する有なれば、其有は非有の有と云
はざるを得ず、既に非空の空、非有の有なるに於ては、有に異なる空あらず、空に異
なる有あらずして、有と云ふも空に異ならず、空と云ふも有に異ならざること、
なり、空、有の間に少しも差別なきに至る、之を般若經には色不異空、空不異色、色即

是空空即是色、と云へり、茲に色と云へるは、有を意味するものにして、宇宙萬差の事相、即ち是れなり、

眞諦俗諦と云へる名稱も以上の説明よりすれば、何にも區別の判然たるものなくして、遂に相依り相交はりて、一物の命名す可からざる合一不離の一體となるに至る、之を眞俗相關或は二諦相依の理と云ふ、

(戊)坐禪、坐禪とは、佛眼遠禪師曰く、大迦葉坐臥經行未だ曾て間歇せず、禪何ぞ坐ならざる、坐何ぞ禪ならざる、此の如きを得了するものを、坐禪と謂ふと、禪とは靜慮の意なり、靜慮とは寂靜にして審慮するの意なり、其目的は人をして心地を開明し、本分に安住せしめんとするに在り、之を本來の面目を顯はすとも、本地の風光を現はすとも謂ふ、畢竟善を思はず、惡を思はず、能く凡聖を超越し、迷悟の論量を透過し、生佛の邊際を離却するに在り、所謂識心見性、或は見性成佛と稱するものは、是れなり、識心見性、或は見性成佛とは、佛と謂ふも自己の心、聖と謂ふも自己の心、神と謂ひ鬼と謂ふも自己の心にして、人の凡人となるも、聖人となるも、佛となるも、鬼となるも、神となるも、皆な自己の心を見るの淺深に依るものなり、凡聖鬼神

皆な斯の如く、自己の有する心を見るの淺深に依るものとする以上は、佛となり聖者となる、敢て難きにあらざるが如し、然れども、其心を見るに一定の道理に依らざるときは、外物の刺激を受くるに依りて忘動するを免れず、而して坐禪は即ち自己の心を見るの唯一の方法なり、依て今諸師の坐禪儀、坐禪普觀儀、坐禪用心記を見るに、其説く所彼の有名なる龍樹論師の中觀論中八不の道理、中道實相の觀念に外ならざるが如し、故に余は今右八不の道理及中道實相の事に付、左に聊か論辯を試み、以て見性成佛、或は識心見性の方法とせん、

八不とは不生、不滅、不常、不斷、不一、不異、不來、不去を謂ふ、之を般若經には不生、不滅、不垢、不淨、不增、不減と謂ひ、傳心法要には、此心、無始已來不曾生、不曾滅、不青、不黃、無形、無相、不屬、有無、不計、新舊、非長、非短、非大、非小、超過一切限量、名言蹤跡、對待當體、便是と謂へるものは、是れなり、是れ畢竟眞理直覺の障害物を除去せしめんとする意に出づ、凡そ眞理直覺の障害物は、獨り外部而已に存するものにあらずして、却て吾人の精神界に存す、即ち吾人の智識及び想像が眞理を擁蔽するに出づるもの多しとす、而して吾人の精神界に縱横左右に相往來するもの際限なしと雖も、要す

るに八不の反對なる生滅斷常一異去來の八種の心象に外ならず、此八種の心象を八迷と謂ひ、八迷を離散せしむる方法を即ち八不となせるなり、此八種の心象が日夜吾人を煩悶せしめ、轉倒せしめ、執拗せしむ、故に此煩悶、轉倒、執拗を打破せんとするには、勢ひ八種の心象をして總て消散せしめざる可からず、之を消散せしむるには八種の心象の起伏來往するは何物に起因するかを知らざる可からず、其根原は畢竟吾人が外物と關係を結びて、利害得失の念旺盛を極め、眞理を見るの明を蔽ひ、事々物々皆な一定不動の形象を有するものなりと觀念するに依る、然れども此心象たる、外物に根原するにあらずして、實に吾人の精神界に於ける作用たるに過ぎず、

試みに見よ、心生すれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅す、山河大地日月星辰是れ偏に吾人の認識より生ずるにあらずや、凡聖賢愚僧俗の別、是れ偏に吾人が起心動念によるにあらずや、心滅すれば吾人に於て山河大地日月星辰ありや、又凡聖賢愚僧俗の區別ありや、三千世界滿目の青山、是れ偏に吾人の心あるによりて三千世界又は滿目の青山たるにあらずや、斯く觀念したらんには宇宙の事、

一として吾人の精神界の作用ならざるはなく、宇宙の物一として吾人の精神を出でず故に心滅すれば種々の法盡く滅盡するなり、果して然らば宇宙の万象は畢竟吾人の心に外ならずして吾人が宇宙萬物の生滅斷常一異去來なりとして心念を動し、思慮を費やせしもの、皆な宇宙萬物の生滅斷常一異去來にあらずして、吾人が心の生滅斷常一異去來なりしなり、既に宇宙萬物の生滅斷常一異去來にあらずることを知りたらんには、須らく無要の思慮分別を拋棄し、其心源に立ち歸るべし、其心源に立ち歸れば心源清淨なるを以て、相に著するの憂なく、心を捨て、外に求むるの要なく、物を捉へ形を追ふの要なく、心即ち理、心即ち佛、心即ち宇宙、宇宙即ち心にして何物も外に假るべきなし、外に假るべきなければ心平にして、生滅斷常一異去來あることなく、即ち其心狀、不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來なり、心が不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不來、不去なれば、是れ有心の無心なり、此有心の無心が即ち禪に謂ふ所の佛なり、神なり、聖なり、儒語を以てすれば大人君子なり、併し乍ら八不を眞として八迷を虚とするにあらず、唯八不の眼光を放ちて、八迷を都見し以て一定不動の心源に立歸るべしと謂ふにあり、

以上説明したる所の八不の眼光を放ちて、前に述べたる真俗二諦を觀念すれば、此宇宙は空にあらず、有にあらず、有は即ち空、空は即ち有の方面より見れば、八迷は眞にして、八不は虚なり、空の方面より見れば八不は眞にして八迷は虚なり、然れども空を離れたる有あらざると同時に、八迷は八不を離れず、有を離れたる空あらざると同時に、八不は亦八迷を離れず、畢竟迷ふも眞理、悟るも眞理、眞理は泰然として常住恒存、言論を立す可からざる圓滿不漏の一理體の輝々地皎々地たるものとなる、之を中道實相と云ふ。

第四項 陽明學說の由來

唐以來の學者は専ら先人の註疏をなすの風行はれて、義理を研究し眞理を發見するの自由思想に乏しかりし、周の世宗大に佛教を斥けたりしが、宋の太祖其禁を解解き、僧侶を印度に遣はし、或は大藏經を印刷す、殊に太宗眞宗は釋經院を置き、諸經論を譯せしめたり、仁宗に至り禪宗最も盛大となれり、佛教は義理を求め眞理に體達せんとするの風ありて、世事に迂なりと云ひしも、しかも學者達識の士は之を受ずるの傾きあり、其反動として儒に屬する學者も、漸く註疏の積習に飽き、且つ古書を

註釋するは古物を品評するが如く、人毎に解解釋を施し見解解を異にし、賞揚するもの貶稱するもの、其說解の何れか正何れか非なるを知る能はざるを知り、傍ら佛教の義理を求め眞理を研究するに對して、註釋に従事するは其權衡を失するのみならず、古先聖王の言と雖も、日月の推移し事物の益、複雑となるに従ひ少許も時世に益する所なきを知り、茲に初めて儒學にも一新生面を開かざるを得ざるの機運に際會せり、之を以て彼の周濂溪の如き、務めて理を盡し名節を勵まし、且つ太極圖、通書等を著はして先人の五性說を哲學的に説明するに至れり、是れ實に時世の然らしむる所、勢の數なりと云ふべし、(陰陽五行の說を知らんと欲せば周濂溪の通書を見れば)二程子之に従ひて學び、訓話を遠げ理義を求むるの情は濂溪よりも厚く、師の研究の法を採りて師說に偏せず、訓話に考へ時代の變遷を察して以て孔孟の眞意を發見せんことを勉めたり、形勢斯の如し、是に於て學者皆な義理を重んじ學をなすは義理を明らかにするに在りとの思想を形成するに至り、當時尙は理義の學を以て二程と共に有名なるもの張載邵雍あり、是等は相交遊し相研鑽して一世を風靡し、唐以來の學風をして全く一變せしめたり、其一變したるは敢て斬新なる眞理を發見したるにあ

らずして、從來の儒學に佛教の理義を加味したるに過ぎざるなり、
今陽明の學說の由來を尋ねんと欲すれば、勢ひ二程子の學說の綱領を知り置くの
必要あり、而して二程子以後は、學海に二派を生じ、甲は一元論を唱へ、乙は二元論を
主張す、一元論は陸象山を経て陽明に至り、二元論は彼の有名なる朱子に至りて大
成す、余は陽明の學說を知るの階梯として、左に二程子及び陸象山の學說の大略を
述べんと欲す、而して朱子の學說を知ること、も必要なきにあらざるも、朱子に至り
ては、讀者既に之を知れるものと思ふを以て、之を贅説せず、

(甲)程明道、張子(張載)が性は常に外物に累されて動せざるを得ざるかを問へるに
對し、彼れ明道は實に左の如く云へり、

所謂定者、動亦定、靜亦定、無將、迎、無內外、苟以外物爲外、奉己而從之、是以己性爲有內
外也、且以性爲隨物於外、則當其在、外何者、爲有內、是有意於斷外、誘而不知性之無內
外也、既以內外爲二本、又烏可遽語定哉、

と其意は、心は常に定まりたるものにして、心に動靜あるも、其身を離れずして、當
に身内の活動たるに過ぎず、故に心は内外あるものにあらず、若し心に内外あり

て、外物に誘惑せられ、掠奪せらるゝことありとせば、既に内に心なしと云はざる
可らず、内に心なしとすれば、何ぞ心の定まることあらんやと云ふにあり、之を佛
教に對比するに、華嚴經に、

心性周徧、虛徹靈通、散之則應萬事、歛之而成一念、是故若善若惡、若聖若凡、無不曾由
此心、

と云へることあり、右經の意は、心性は虛徹靈通、古今に通じ、萬物に亘り、天の高き
も之を透極し、地の厚きも之を測知し、動轉自在、靈妙不測の活動を有す、故に之を
散すれば萬事に應じて、明透せざるなし、又之を收斂すれば、單に一念をなすに過
ぎずして、世の善惡聖凡の區別はあれども、其基く所は一にして、心より外になし
と云ふにあり、彼是其言を異にすれども、其意は粗ぼ同一なり、且つ清涼の華嚴の
大疏には、往復無際、動靜一源と云へることあり、彼れ明道が説、蓋し其基く所是等
にあらんか、

尙ほ彼が生之謂、性性即氣、氣即性、生之謂也と云ひて、性と氣を同物となし、以て天
地の間に充溢する元氣を以て性と同視せり、此性より生するものを道心と云ひ、

道心の悪なるもの即ち物欲に蔽はれたるものを人心と稱し、茲に道心人心の別を立て、道心を以て理、或は性、或は氣と同一視し、理は是れ心、心は是れ理、理は是れ性、性は是れ氣と云ひて、其間に少しも區別を設けざりし、要するに性と云ひ、氣と云ひ、心と云ふ、皆な同物の異名たるに過ぎざるの思想に歸着せしめたり、而して孔孟の稱道する彼の仁と稱するものも、亦氣或は理、或は性、或は心なるものと同一に見做し、仁を以て天地間最高の善となし、以て大に主觀的、内省的、一元論を鼓吹せり、

右を佛教と契合せしむるに、佛教は一箇の無、一箇の空を説く、而して其無其空なるものは、無意義のものにあらず、所謂無とは、有を包含する無なり、空とは有を包含する空にして、天地間の實有を究盡せる上に立つ所の眞理を指せるものにして、程明道が理、或は氣、或は仁と謂へるものも、亦此天地間の實有を究盡して其上に立てる無上の眞理、最上の理想を表現するに外ならず、故に其意は將さに佛教の法性、或は眞如と稱するものに相當するを知るを得べし、
以上述ぶるが如く、程明道の説佛教に源因する處多し、其佛教に採りたるは偶然

にあらざるなり、彼は實に天地萬有の原理に對して其如何なる性質を有するものなりやを研究せんと熱望せり、彼が弟伊川は能く之を明言せり、曰く「先生爲學自十五六時聞汝南周茂叔論道途厭科舉之業、慨然有求道之志、未知其要、泛濫於諸家、出入於老釋者幾十歲」と、之を以て見るに、彼は宇宙萬有に一定の眞理あることを信じ、其眞理の如何なるものありやを究めんが爲めに、諸家に泛濫し、遂に老釋にも侵入せるなり、知るべし、彼が唱道する所、佛教に寄和する所多きを、然れども彼は其守る所に於て飽くまで儒者なり、其一家の説として世に發表し、門下に傳へたるもの、易に採る所多し、然れども余は斷言す、彼が宇宙萬有に對する根本の觀念、及び人性の性質に對する觀念は、佛教に立する宇宙の大原理たる眞如、或は法性の觀念に依據したるものなることを、彼は佛教の原理を採り乍らも尙ほ佛教を非難せり、曰く

釋氏之學於敬以直、內則有之矣、義以方外、則未之有也、故滯固者入於枯槁、疏通者歸於恣肆、是佛之教所以爲隘也、吾道則不然、率性而已、斯理也、聖人於易備言之、釋氏本怖死生爲利、豈是公道務上達而無下學、然則其上達處豈有是也、元不相連屬

但有間斷非道也孟子曰盡其心者知其性也彼所謂識心見性是也若存心養性一段則無矣

要するに彼れは向内的一元論者なり内外一徹動靜一元の主觀的論者なり有無透徹理事同元の思想家なりしなり

(乙)程伊川、程明道が内外一徹動靜一元理事圓融の一元論者たるに拘はらず之が弟たる併かも門を同ふして子弟の教養に従事したる程伊川は實に二元論を唱へたり是れ彼れが所信なれば動かす可からざることに屬するは言を俟たすと雖ども惜むべし彼れが此二元論を唱へたるが爲め彼れが門下に二派を生じたる而已ならず彼以後の儒學者をして全然二派に分立せしめ論難攻難至らざるなく甚だしきは黨を結び相排擠し遂に解く可からざるに至れり然らば彼れは如何にして二元論を唱へたるか今其來歴を尋ぬるに彼れが兄たる程明道が生之謂性即氣氣即性生之謂也と謂ひて性と氣とを同一視し而して其性或は氣なるものは天地間生々の理にして日月星辰の運行春夏秋冬の循環風雨迅雷煙霧雲霧の聚散一も其所を誤らず生々として萬物を化育するの理と同一なり而して

て人生の氣稟に善惡あり然れども其善なるものは勿論惡なるものも亦是れ性にして氣稟の善惡は尙ほ水に清濁あるが如く其清めるものは固より其濁れるものも亦水の性なりと謂はざるを得ず是れ性に善惡あるにあらず氣稟に清濁あるものにして氣稟の清濁は性と對峙するものにあらずと謂ひて性の善なりや惡なりや亦善惡混淆のものなりや否やに付大に其解説に苦めり是に於て程伊川は性は善なれども氣に善惡あり清濁あり若し人善にして清き氣を稟けて生るゝときは善なれども惡にして濁れる氣を稟けて生るゝときは惡なりと即ち彼れ曰く

性出於天才出於氣氣清則才清氣濁則才濁才則有善有不善性則無不善

性無不善而有不善者才也性則是理理自堯舜至於途人一也才稟於氣氣有清濁稟其清者爲賢稟其濁者爲愚と

斯の如く性と氣とを判然區別して二となし性は善而已にして氣には善惡あり人の賢愚正邪の分るゝ所は實に氣稟の致す所にして其濁れる氣を受くるものは愚となり邪となり清める氣を稟くるものは賢となり正となるなり而して性

は即ち理理は人物を通じて普遍的にして邪惡なしと斷言せり、右の如く彼は明道の一元論に對して二元論者となれり、即ち明道の性善論に對して性の善なるとは之を動かさずして、明道が謂へる天地間の理、或は性、或は心、或は仁を以て、彼れも亦之を圓滿なる善と爲し乍ら此の圓滿なる善が宇宙萬象となり、人類となり、草木となり、金石土壤となるに際し、氣なるものゝ働きを受け、初めて善惡清濁の區別を生ずるものなりと斷言し、以て全く二元論を主持するに至れり、彼の學説は總て此大綱より出づ、門下に教へ或は孔孟の書を解し、或は爾餘の學説に涉る、總て此大綱領より出でざるはなし、此大綱領より彼れは爲學に對し如何なる考を有したりやを見んに、

學以至聖人之道也、聖人可學而至、歟曰然、學之道如何曰、天地儲精得五行之秀者爲人、其本也、直而靜、其未發也、五性具焉、曰仁義禮智信、形既生矣、外物觸其形而動其中矣、其中動而七情出焉、曰喜怒哀樂愛惡欲、情既熾而益、蕩其性、鑿矣、其故覺者約其情、使合於中、正其心、養其性、愚者則不知制之、縱其情而至於邪僻、捨其性而亡之、然學之道必先明諸心、知所養、然後力行以求至、所謂自明而誠也、誠之道在乎信道篤、信道

篤則行之果、行之果則守之固、仁義忠信不離乎心、造次必於是、顛沛必於是、出處語默必於是、久而弗失、則居之安、動容周旋中禮而邪僻之心無自生矣、

右の文中、其本真にして靜なり、其未だ發せざるや五性具はると謂へるものは、人の天性渾全純白にして動かす、天理自ら備はりて仁義禮智信其中に在るを指せるなり、然れども是れ未だ物に接せざる前の事なり、物に接するに至りては外物爲めに其天性の渾全純白を動かすものとなせり、そは外物其形に觸れて其中を動かす、其中動て七情出づと謂へるもの即ち是れなり、而して彼れは情熾んにして益蕩すれば其性を戕賊すと謂ひて、渾全純白の性も外物の爲めに、即ち彼の他語を以てすれば氣の爲めに其性を失ふとなせり、

如上の論旨は彼れが二元論より出づる自然の結果にして、心の外に氣を設け道を設けて以て之に近かんとするを學なりと爲せるより自然に出づるもの故に、彼れ曰く學の道先づ諸を心に明らかにして養ふ所を知り、然る後力め行ふて以て至るを求む、或は誠の道は道を信すること篤きに在り、道を信すること篤きときは則ち之を行ふこと果すと、以て知るべし、彼れが道は實に心の外にありて

心と相對するものなることを、

(丙) 程門以後の學 程門下に二箇の學派を生じたるは前既に之を明らかにせり、即ち明道の一元論は謝上蔡王震澤等を経て陸象山に至り、遂に王陽明に至りて發達の頂上に達し、伊川の二元論は楊龜山羅豫章を経て李延平に至り、遂に朱晦菴に至りて發達の頂上に達せり、今左に之が系統を知るに便せんが爲め、圖解を示さん、



陳白沙 王陽明

(丁) 陸象山 陸子は二元論者にして朱子は二元論者なり、朱子は理と氣、或は道心と人心、或は本體と現象と謂へるが如く、宇宙の森羅萬象と對照して、理或は性、或は

天と謂ひて、恰も西洋哲學に實體と云へるが如き、一の森羅萬象の本源となるべきものを認む、彼れ曰く「物の名義、氣の理と通ず、天の天たる所以を貫く、本と何ぞ爲さん哉、蒼々焉のみ、其之を名けて天と曰ふ所以は、蓋し自然の理なり、名は理に出で音は氣に出づ、是に由て宇宙擧げて窮む可からず」と、明らかに理と氣とを分ちて二となせること斯の如し、又曰く「氣に清濁あり、而して道心は理に基き、人心は氣に基く、氣に清濁あると同時に人心に清濁あり」と、是れ彼の學問に於ける根本の觀念にして、縱横百出の論、皆此觀念より湧出す、而して此觀念たる彼れの首唱にあらずして、程伊川の思想たることは、前既に説明せるが如し、然るに陸子は之に反して、此理氣或は人心道心の區別を否定し、宇宙間には人心より外に何物もなし、宇宙間一切のことは皆な心が中心となるものにして、森羅萬象の根元は唯一の心に在りとなし、以て一元論を立てたり、今陸子の學の他の學者と異なる主要の點を左に摘説せん、

(一) 心 彼は理氣の別、人心道心の別を認めず、今人心道心の學者の言に上りし所以の由來を尋ぬるに、其元と尙書の人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中に基

くもの而して陸子は之に付隨して曰く、罔念作狂克念作聖非危哉無聲無臭無形無體非微乎と、道心人心は唯一無二、唯活動の様式に従て聖となり凡となり正となり邪となるものなりとなす、彼れ尙は天地人欲と云へることを説破して曰く、天理人欲之分論極有病自禮記有此言而後人襲之記曰人生而靜天之性也感於物而動性之欲也若是則動亦是靜亦是豈有天理人欲之分動若不足則靜亦不是豈有動靜之間哉と、靜も性より出づ、靜善ならば動も亦善、何ぞ靜の善にして動の不善なるの理あらんや、動靜共に天性に基くものにして、二者の間に區別を立て以て之を二にするを要せんやと、斯の如く彼は道心人心の別を破却せり、天理人欲の別を否定せり、而して一箇の動もなく靜もなく、混然として理の本體とも言ふべき心を認めたり、

(二) 心即理、彼は世の學者の性情、心才等を區別して説くを否認して曰く、聖人人を教ふるに急にして種々の名を以てすと雖も、其實は同物にして世間通稱の言語に依りて説明せしのみ、尙は是等の名稱は雪、雹、霰、雨、露等の、其名を異にするれども其實同物なるが如しと、而して之を貫くものは理なり心なり、彼れ之を

細説して曰く、

古聖賢之言大抵若合符節蓋一心也理一理也至當歸一精義無二此心此理實不容有二故夫子曰吾道一以貫之孟子曰夫道一而已矣又曰道二仁與不仁而已矣如是則爲仁反是則爲不仁仁即此心也此理也求則得之得其理也先知者知此理也先覺者覺此理也愛其親者此理也敬其兄者此理也見孺子將入井而有怵傷惻隱之心者此理也可羞之事則羞之可惡之事則惡之者此理也是知其爲是非知其爲非者此理也宜辭而辭宜遜而遜者此理也敬此理也義亦此理也內此理也故曰直方大不習無不利

と、心は一心なり理は一理なり、至當歸一、精義無二、此心此理、實に二ある可からずと謂ふに至りては、簡易直截にして程伊川或は朱子が氣に清濁あり、或は天下の事物各一理ありと謂ふに比するに、實に天地雲泥の差あり、而して彼は孟子の仁義禮智信皆な一箇の心字一箇の理字を説明せるものとなし、内外動靜皆な一心一理の形體に過ぎずと斷せしは、即ち彼れが明道を尊信して尙ほ夫より一步を進めたるに依る、彼れの學は實に心を以て其目的物とせり、即ち心

が起點なり、理が中心なり、天下の事皆な理ならざるはなし、天下の物皆な心ならざるはなしと謂ふにあるなり、是れを西洋哲學者にて之を求むれば、彼れは實に東洋のフイデナリなり、フイデの謂へる、此宙宙には自我より外に何物もなし、非我は自我ありて後非我たり、故に一切の非我は自我の反響たるに過ぎずと、實に東西好一對なりと謂ふべし。

(三)工夫 彼れ陸子は純然たる唯心論者なり、萬物皆な我に備はる底の論者なり、故に彼れが脩爲の工夫は一に心を自得するに在り、彼れ曰く

孟子曰所不慮而知者其良知也、所不學而能者其良能也、此天之所與、我者我固有之、非由外鑠我也、故曰萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉、此吾之本心也、所謂安宅正路者此也、所謂廣居正位大道者此也。

と、即ち心は良知良能を有するものなり、良知良能は古今を通じ人と物とに普遍す、之を自愛し之を自重し之を活動せしめて、鐵ゆるとなからしめば、事として通せざるなく物として成らざるなし、所謂孟子の天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行き、志を得る民と之に由り、志を得ざる獨り其道を

行ふ富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はずと云へるが如く、或は亦言禮義にあらず之を自暴と謂ひ、吾身仁に居り義に由る能はず之を自棄と謂ふ、仁は人の安宅なり、義は人の正路なり、安宅を曠ふして居らず、正路を捨て、由らず、哀い哉、自暴のものは與に言ふある可からず、自棄のものは與に爲すある可からずと云ふが如し、要するに彼れは心或は理を以て宇宙萬物を包容するものとなし、而して此心此理は人の生れ乍ら有するものなるを以て、之を所持して自暴自棄に陥らず、物欲に塞蔽せられずして、能く本有の能力を發揮せしむれば、即ち是れ大人なり、君子なり、聖人なりと謂ふにあり。

第五項 宋明の二大思潮

陸子が斯る簡易直截の説を立てたるものは、程明道に基くと雖も亦兼て當時學者間に流行せる佛禪の教理に影響せられたるに基くもの多し、然れども又思想の潮流として勢の然らしむる所ありしならんか、蓋し歐大陸に於てカントが吾人は宇宙の本體を知る能はず、唯其現象を知ることを得るのみ、吾人の智識は二條件より成立す、即ち(一)外界の刺激ありて吾人の心に影射すること、(二)心は一種の能力を有

して其影射を調整するとは是れなりと説き立てたるに基き、カント以後の學者は二派に分れ、カントの(一)の條件に重きを置くものは、唯物的實在論を主張し、(二)の條件に重きを置くものは、唯心的理性論を主張せり、此の二者兩々相下らず、カント以後の論争は實に此二派に出でざりき、而して彼の有名なるフイヒテ、セルリング及びヘーゲルの如きは、理性論者に屬し、ヘルバルト、シヨペンハワー、ハルトマンの如きは、實在論者に屬せるなり、之と同じく程明道は一元論を唱へ、程伊川は二元論を取りたるより、程門に二派を生じ兩々相下らず、以て支那の學海を騒かしたるは東西一轍、思潮の勢亦然るべきものあるか、案するに程門が五代殊に漢唐訓詁の學に厭き、傍ら佛教の影響を受けて、理學を唱へ、彼の從來の儒教を一變し了しぬ、而して南宋に渡るの後、朱子六經を註述し、斯道を倡明するを以て任と爲す、傍ら當時張南軒呂東萊の二子あり、其說稍出入ありと雖ども、而かも師友覃討、朱子を推して盟主となす、唯陸子ありて肯て信服せず、互に相假借せず、而して朱子の學、理氣の二元に基くを以て物理を窮むるを先務とし、居敬を以て修爲の工夫と爲す、之に反して陸子は専ら吾心を立つるを以て主となして、復た書を読み理を窮むるを以て先務と爲さ

ず、抑も陸子の此論を唱ふる、或は朱子が徳性と問學とを折り二となせるにより、其結果、益煩細に流るゝの勢ひあるを救はんが爲めなることも、與りて力ありしならんも、陸子が斯る簡易直截の思想を有するに至りしものは、前にも一言したるが如く、當時佛教の勢力侮る可からざるものあり、苟も學を以て世に立つものは、何れも佛教の眞理の一般を知らざる可からざるの形勢ありて、陸子の如きも亦深く佛教に目を晒したる結果ならずんばある可からず、尙ほ是等の消息は後に至り論すべき機會あるべし、而して天下の學者或は朱を祖として陸を排し、或は朱を疑ふて陸を信じ、二箇の思潮大流は流れて相合せず、而して二元論は朱子に大成して今日に至り、一元論は陸子に半成し、陽明に大成して、以て今日に持續せるなり、

第六項 陽明教と佛教

余は陽明の學説を以て、其根本の思想佛禪に基くものにして、殆んど佛禪に異ならずと斷言せんとするに當り、彼れ陽明が其經歷に於て、佛教と如何なる關係を有するやを一言するの必要あり、

伊藤東涯曰く、王子蓋し新安の支離に厭きて、肯田の簡易に従ふと、其言當らずと雖

も、亦陽明の當時に於ける意中の一端を能く看破したるものと謂ふべし、抑も程子門下に二派を生じて以來、二派共に盛に研究せられ、其理論も月を重ね年を経るに従て益精緻に趣きたるは言を俟たずと雖も、彼の朱子に至りては、識力大にして器宇も亦た廣く、他の學者の企及す可からざる所あり、殊に學問に志篤くして二元論も彼によりて大に其基礎を固められたり、之を今より觀察すれば、彼の時代は殆んど其發達の頂上に達したるものにして、其勢も亦當時の學海を風靡するの概ありしなり、然れども其勢の盛なると同時に、細密の研究行はれ、枝葉に涉りて根本の觀念を失ひ、煩細に陥り、支離滅裂殆んど捕捉するを得ず、學者をして入る所を失はしむるのみならず、人をして大に其信僞を疑はしむるに至れり、是に於て陽明は其弊を知り、且つ學者人心に益なきを悟り、程明道の跡を求め、象山の風に倣ひて、漸く青田の簡易に従はんと欲したり、然れども唯に新安の支離に厭き、青山の簡易に従はんと欲したりとて、明道、象山の跡を追ふのみにては、時好に適せず、故に將さに進むべき新路を見出し、能はずんばある可からず、陽明は其新路を何れに求めたりや、蓋し陽明は其根本の觀念を佛に採り、以て儒を之に引付けんとせしならんか、宋代以

來、佛教は上下に蔓延し方に盛に義理を研究せられ、有識の士も多かりしなり、故に彼の周子、邵子、程子の如きすら、訓詁辭章にのみ從事する能はず、更に佛に依りて義理を求めしなり、彼れ陽明の如きも、一時は大に佛教を研究し、殆んど心酔の有様に在りしなり、今陽明と佛との關係に付き、其消息を詳にするは、本書に於て特に價值あることと思意するを以て、左に之を論述すべし、

陽明が經歷に就て見るに、彼れは三十歳前後に至るまでは、豪邁不羈何事も成らざる事なしと思ひしなり、故を以て彼れは書を讀み字を習ひ、神仙の術に耽り、聖學を追求し、老釋に心酔し、用兵武術に心を止め、又或時は舉業に勉め、時事を談せしなり、今彼れが年譜を案するに、其三十一歳の時、是年先生漸悟、仙釋二氏之非、先是五月告病歸、越築室陽明洞中、行導引術、久之先知、後悔曰、此篋旁精神、非道也、屏去之、已而靜久、思離世、遠去、惟祖母岑、與龍山公在、念因循未決、久之又忽悟曰、此念生於孩提、此念可去、是斷滅種性矣、是れ彼れが元氣に任せ物を追ひ事を修めんとあせりたる結果、心理的絶望に傾き、漸く厭世の思想を誘致せしなり、其此念生於孩提、此念可去、斷滅種性、と看破したる所は、世の所謂轉然大悟、或は大悟徹底の端を開けるものにして、彼

れが太公至正の一元論、宇宙一貫の良心説を採る、實に此處に在るなり、其明年即ち彼れが三十二歳の時、疾を鏡塘の西湖に養ひ、南屏虎跑の諸刹に往來せり、是れより彼れは心を更め思を反し、世に用ゐられんことを希へり、或は史事を事とし、或は人心開導世の先覺者たらんの志を立て、或は時事を評し、政事の得失を論ずるに至り、遂に彼れは諫を以て帝意に忤ひ、不幸龍場の驛丞に謫官せらる、是れ實に彼れが三十五歳の時にありき、居ること三年、龍場は貴州の西北、萬山叢棘の中に在り、實に蛇虺魍魎の地たり、一日自ら計るに得失榮辱皆な能く超脱す、唯生死の一念尙ほ未だ化せず、乃ち石礫を造り自ら誓ひて曰く、吾れ惟命を俟つ而已、日夜端坐澄默して以て靜一を求む、之を久ふして胸中瀟々として、忽ち中夜大に格物致知の旨を悟る、麻痺の中、人の語るものあるが如く、覺えず呼號せり、茲に於て初めて聖人の道、吾性自ら足る、向きの理を事物に求むるものは、皆な誤りなることを悟れり、是れ彼れが三十七歳の年にして、將に是れ大悟徹底の時なりとす、余思ふに彼れは此時まで、未だ神、仙、老、佛、儒、其何れをも未だ彼れが心を満足せしむるを得ず、半信半疑の中に靜一を守り來りしも、彼れをして未だ大悟徹底の機を興へざりし、一旦龍場に野鶴と

なりてより、遂に彼れが心酔して研究體驗せる佛の思想をして儒に一致せしめ、以て豁然として大悟を得るに至りしなり、要するに彼れ陽明は其行跡事業思想より考ふるも、所謂多血性の人にして、且つ其性質や聰敏果決、人後に立つを厭ひ、當時流行せし老佛、神、仙、射、騎、詞、藻等、苟も力の及ぶ限り、之を研究したりしなり、彼れが研究は甚だ多角的なり、彼れが一生の跡は、或時は學問に志し、或時は養生の術を學び、或は詞章に耽り、政事を談じ、官邊に仕へ、邊偶に足を止め、軍に従ひ、自ら俗人の是非を招きたること多かりし、斯の如く變化多き彼れが境遇は、安心立命に重きを置きたる老釋の如き學問に熱中せしむるに至らしめ、之を以て彼れが終局を結束するに至らしめたるは亦偶然にあらざるなり、今參考の爲め彼れが其門下生と講學するに當り、佛の教理に説及せる節を見ん、

一友問て曰く、佛家手指を以て顯出して問て曰く、衆會て見るや否や、衆曰く之を見ると、復た手指を以て袖に入れて問て曰く、衆還て見るや否や、衆曰く見すと、佛説く還て未だ性を見ざるやと、此義明らかならずと、陽明答へて曰く、
手指有見有不見、爾之見性常在、人之心神只在有、覩有聞上、馳驚不在、不覩不聞上、著實

用功蓋不親不聞是良知本體戒慎恐懼是致良知的工夫學者時時刻刻常親其所不親常聞其所不聞工夫有箇實落處久久成熟後則不須着力不持防檢而真性自不息矣豈以在外者之聞見爲累哉

或人釋氏の務めて心を養ふ然るに天下を治む可からざるは何ぞやと問ひしに答て曰く、

吾儒養心未曾離却事物只順其天則自然就是功夫釋氏卻要盡絕事物把心看做幻相漸入虛寂去了與世間若無些子交涉所以不可治天下

汝中が佛家の實相幻相を擧げて問ひたるに答て曰く、

有心俱是實無心俱是幻無心俱是實有心俱是幻

右の如き言語問答は彼れ陽明の書中所々に散見し今之を枚擧るすに逸あらず要するに彼れは明の太宗成宗儒學を尙び宋學を重せるより一方に薛敬軒胡敬齊等の程伊川朱子の學を研究せるに對して程明道陸子を繼承して陳獻章等と大に理性の學を研究し茲に一派の學を開き良知良能を重んじ直情直行を重んじたり是れ彼れが性質として自然に然らしめたるものあり雖とも其幼時より老釋の學に

心醉し諸佛書を涉獵し大に到りたる所あり且つ偶々以て彼の境遇が佛教の實際的研究をなすの機會を與へたるに出づるもの其儒語を以て佛教の理論を説き而して其表面上未だ全く佛に歸せざるものは當時の社會一般の風潮及び彼れが境遇に於て之を許さざるものありしならんか

第二編 心論

第一項 王學根本の觀念

陽明が學問の基本は心に在り、彼れが心を説くや、心即ち理、或は虛靈昧からず衆理具つて萬事出づ、心外理なし、心外物なし、或は物理吾心に外ならず吾心を外にして物理を求むるも物理なしと云ひて、總ての事皆な心を基礎とし、縦横の論遂に理を以て心に歸一せしむ、又其性を論ずるや、性は理なり、理は心の本體なり、故に天下性外の物なし、或は心の本體は即ち性なり、性は善ならざるとなければ、則ち心の本體正しからざることなしと云ひて、理を以て性となし、性を以て心に歸一せしむ、又其身を論ずるや、何を身と謂ふ、心の形體運用の謂なり、何を心と謂ふ、身の靈明主宰の謂なり、吾身自ら能く善を爲して惡を去らんか、必ず其靈明主宰なるもの、善を爲し惡を去らんと欲して、然る後其形體運用なるもの、始めて能く善を爲して惡を去るなり、故に其身を修めんと欲するものは、必ず先づ其心を正ふするにありと謂ひて、形體の善惡を以て、心に歸一せしむ、斯の如く彼れが學問の燒點、中樞は、則ち心に在

り、彼れが研究の目的物は、唯一の心に在り、心を知り、心を研ぎ、心を盡すを以て、人生の能事終れりと爲せるなり、故に彼れ曰く、聖人之學心學也、堯舜禹之相授受、曰人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中、此心學之源也、中也者、道心之謂也、道心精一之謂、仁、孔孟之學、惟務求仁、蓋精一之傳也、而當時之弊、固已有外求之者、故子貢致疑於多學、多讓、而以博施濟衆爲仁、夫子告之以一貫、而教以能近取譬、蓋使之求諸其心也、其聖人の學は心學なり、堯舜禹の相授受する此心學に外ならずと斷言し、而して彼れは尙ほ孔孟の仁と謂へるは、道心精一の謂ひにして、道心精一は是れ心の本體なれば、仁と謂ひ義と謂ふも正を得たる心に外ならず、忠と謂ひ孝と謂ふ亦皆心より湧き出づる所、衆善の淵源一に心に在り、故に外に假るを要せず、總て内に省み、心に求むるを以て足れりとなせり、尙ほ彼れは心の廣大流行にして、物事と融合し、物事と合一し、停留支吾する所なく、能く天地萬物と合體して、靈昭明覺なることに付、實に左の如く謂へり、

大人者以天地萬物爲一體者也、其視天下猶一家、中國猶一人焉、若夫間形骸而分爾我者、小人矣、大人之能以天地萬物爲一體也、非意之也、其心之仁本、若是其與天地萬物而

爲一也、豈惟大人雖小人之心亦莫不然、彼顧自小之耳、是故見孺子之入井而必有怵惕、惻隱之心焉、是其仁之與孺子而爲一體也、孺子猶同類者也、見鳥獸之哀鳴、料其而必有不忍之心焉、是其仁之與鳥獸而爲一體也、鳥獸猶有知覺者也、見草木之摧折而必有憫恤之心焉、是其仁之與草木而爲一體也、草木猶有生意者也、見瓦石之毀壞而必有顧惜之心焉、是其仁之與瓦石而爲一體也、是其一體之仁也、雖小人之心亦必有之、是乃根於天命之性、而自然靈昭不昧者也、

と陽明が學問の基礎根本は、唯一の心を攻究するに在り、彼れは實に極端なる唯心論者なることは、前既に之を述べたり、而して彼れの此思想は之を佛教に基因するものなることも既に之を斷言せり、抑も佛教なるものは、一口に之を謂ふときは、簡單なるが如くなれども、其實然らず、元來佛教の救治せんとする所は、人と生れて苟も生命を有し、事物に接する以上は、必ず諸種の煩惱あるを免れず、殊に生死の迷想は人生の一大困事たり、此煩惱此迷想を救治して、真理定住の大海に棹し、一毫の留滯なからしめ、悠悠自適、以て其生を完ふせしめんとするにあり、而して直接に消極的には苦を滅し、生死を脱するを以て、主眼とする如くなれども、其苦を滅し生死を

脱する結果として、積極的に樂を生せしむるを得るは、心理現象の定數なり、故に佛教は消極的に苦を滅せんとする目的より起り、積極的に安心歡喜を得て、初めて其目的を達したるものと云ふべし、而して人には上知下知、千差萬別なるを以て、之を救ふる法も亦一定平等なるを得ず、其智識の程度に應じて各進むべき道を設けざるを得ず、之を以て普通には八萬四千の法門と云ふも、之が爲めなり、然らば彼れ陽明は、佛教の何れによりて心理を求めたるか、蓋し彼れは佛教の最も高尚なる、併かも當時最も盛なりし禪に依りて、其思想を固めたるものならん、今之を佛禪に比照するに、傳心法要に、達磨從西天來、唯傳一心法、直指一切衆生本來是佛、不假修行、但如今識自心、見自本性、更莫別求、或は直指人心、見性成佛と謂へることあり、支那に於ける佛禪の祖たる達磨にして、他に傳ふべきなく、唯一心法を傳へ、或は直に人心を指して見性成佛すと謂へり、然らば此心法が是れ佛禪の目的物なり、陽明が性を説き、理を説き、身を説く、皆な其心に歸一せしめ、殊に聖人の學は心學なりと斷言するは、少なくとも彼れ佛禪に其源を汲みたる結果ならんばある可からず、又傳心法要に、諸佛與一切衆生、唯是一心、更無別法、此心無始已來、未曾生、未曾滅、不青不黃、無形無

相不屬有無不計新舊非長非短非大非小超越一切限量名言蹤跡對待當體即是動念即乖猶如虛空無有邊際不可測度唯此一心即是佛と又佛與衆生一心無異猶如虛空無雜無壞如大日輪照四天下日昇之時明徧天下虛空未曾明日沒之時暗徧天下虛空未曾暗明暗之境自相凌奪虛空之性廓然不變佛及衆生之心亦如此若觀佛作清淨光明解脫之相觀衆生作垢濁暗昧生死之相作此解者歷河沙劫終不得菩提是等佛禪の佛心と衆生心と云へることを以て陽明が大人の心小人の心と云へるに比照して相互其意味を考査するときは雖る可からざる契合の其間に存するを見る其他彼が大人なるものは天地萬物を以て一體となすものなり其天下を見る猶一家の如し中國猶一人の如しと云へるは禪の即心是佛上至諸佛下至蠢動含靈皆有佛性同一心體と云へると何の撰ぶ所ある亦彼れが怵惕惻隱の心を推して鳥獸の哀鳴齟齬に及ぼし草木の摧折に及ぼし瓦石の毀壞に及ぼし以て之を一體の仁となし小人の心と雖ども亦必ず之れあり是れ乃ち天命の性に根く而して自然に靈照味からざるものなりと云へるも亦佛禪の下の文により能く其根據を知るを得即ち「是法平法無有高下是名菩提即是本源清淨心與衆生諸佛世界山河有相無相徧十方

界一切平等無彼我相此本源清淨心常自圓明徧照世人不悟只認見聞覺知爲心爲見聞覺知所覆所以不親精明本體と兩者の意其間如何なる點に於て差異あるかを見出すを苦まざるを得ず是に至りて彼れ陽明も亦禪にあらざるかを疑はしむ要するに王學根本の思想は天地萬物有情非情總て皆な唯一の心にあり故に心の性質を知り心の活動を究むれば其中に萬事萬物皆な完備するものとなし而して心なるものは自性圓明無礙人物を通じて四海に達し天地に塞り古今に亘り具はらざることなく同じからざることなく或は變ずることあることなきものとなせり是れ佛禪の所謂心法に相當し此心法たる言説の相を離れ名字の相を離れ心縁の相を離るゝ畢竟佛と衆生と蠢動含靈と山川草木と有情非情とによりて心性二あることなく又有爲有作の中に於て變異あることなく又迷悟清濁と見聞と不見聞と覺知と不覺知とによりて破壊せらるゝことなき唯一無二の一心法體にして靈昭昧からざるものは是なり唯其文字を異にして同一の理を叙述したるに止まるならんか

第二項 陽明の心の觀念

舜の天下を禹に授くるに當り、人心惟危、道心惟微、允執其中」と謂へり、朱子之を解して曰く、爲有、人心道心之異者、則以其或生於形氣之私、或原於性命之正、而所以爲知覺者不同、是以或危殆而不安、或微妙而難見耳、然人莫不有是形、故雖上智不能無人心、亦莫不有是性、故雖下愚不能無道心、二者雜於方寸之間、而不知所以治之、則危者愈危、微者愈微、而天理之公卒無以勝、夫人欲之私矣、精則察夫二者之間、而不雜也、一則守其本心之正、而不離也、從事於斯、無少間斷、必使道心常爲一身之主、而人心每聽命焉、則危者安、微者著、而動靜云爲、自無過不及之差矣、以て人心道心の二者を立て、人心は形氣ある吾人々類の外物に誘惑せられて利害得失を考慮する私心に出で、道心は天然的に有する吾人の天性に原因する、所謂大公至誠の天稟に原くとなし、而して上智下愚共に人心道心を有し、二者方寸の間に交はる、故に之を治むる所以を知らざる可からず、必ず道心常に一身の主となりて、人心之が命を聽がざる可からずと、謂ひたるに對し、彼れ陽明は曰く、心一也、未雜於人、謂之道心、雜以人、僞謂之人心、人心之得、其正者、即道心、道心之失、其正者、即人心、初非有二心也、程子曰、人心即人欲、道心即天理、語如分折、而意實得之、今日道心爲主人、人心聽命、是二心也、天理人欲不並立、安有天理爲

主人欲又從而聽命者」と謂ひて、人心道心の二を立てず、心は一也、道心の正を失ふものは人心、人心の正を得るものは道心、言を換へて謂へば、中夜人なきとき、七情の私を滅して、靜に事物の是非善惡を考慮するに當りて、發作するものは、彼れ朱子の所謂道心にして、自己の利害得失を先きにし、以て事物に當る、是れ即ち人心なり、然れども中夜儻なき時の心も、亦利害得失に惑はされたる時の心も、共に一心にして、人身に二心あるにあらず、故に道心滅すれば、人心生じ、人心滅すれば、道心生ずるものにして、人心道心並立することなし、要するに、人心道心と立つるは、必の發作狀態に過ぎずして、心は二あるものにあらずと謂ふにあり、

右の理由よりすれば、彼れ陽明か道心とは、心の本質本體を指したるものならざる可からず、心の本質本體は、彼れが所謂良心なり、然らば良心と云ふも、道心と云ふも、其名は異なれども、其實は同物ならざる可ならず、思ふに、彼れが意は天地間には、理より外に何物もなし、運用發作の森羅萬象は、理の活動せる本體なり、此理人に配するときは、性にして、性の運用發作する活動が、即ち道心なり、而して道心となりて、茲に事物との關係起る、此關係に於て、人欲の私に蔽はれたるものが、即ち人心にして

其人欲の私に擁蔽せられざるものが、即ち道心なりと云ふにありて、之を圖に示せば凡そ左の如くならんか、



右の如く性も心も等しく、理の圏内にあるより見れば同一なれども、其差別より云へば理の人物に配せられたるものは性にして、性が事物との關係に於て活動的となりたるものが即ち心なり、心の正を得たるものは道心にして其正を失ふものは人心なり、

要するに彼れ陽明は、人欲を離れたる清淨無垢の失天的、心生活の状態を基本として、之を説明せんが爲めに、機に應じ物に従ひ、時と場所とによりて種々の名を下したるものにして、之を西洋哲學に考ふるに、ヘーゲル等一元論者の云へる、理性を以て、理或は性と云ひ、理性の發作を以て心と云ひたるに過ぎざるか、尙ほ彼は、性一也、自其形體也、謂諸天、主宰也、謂諸帝、流行也、謂諸命、賦於人也、謂諸性、主於身也、謂諸心、と云ひ亦其心を脩むる方法としては、只要去人欲存天理、方是功夫、靜時念々去人欲存天理、動時念々去人欲存天理、不寧靜不寧靜、と

今右陽明が人心道心一元の觀念を、佛禪に比照するに、即心是佛無心、是道、但無生心動念有無長短、彼我能所等心本是佛、佛本是心、心如虛空、所以云佛眞法身猶如虛空不用別求、有求皆苦、設使恒沙劫數、行六度萬行、得佛菩提、亦非究竟、と云へるは彼れ陽明が

心は一なり性は一なりと云へるに同じく右の文中、即心是佛是道と謂へるは、彼れ陽明の道心に相當し、彼れの言を以てすれば、別に又理、或は性と名くるものにして、佛の言を以てすれば、自性虚通、或は心真如、或は真如法性、或は一真法海の大總相と謂へるに相當す、彼れは儒の言に倣ひて之を道心と云ふも、其意義に於ては少しも異なることなし、尙ほ之と類似したるものを求むれば、彼のカントが、吾人は宇宙の本體を知る能はず、唯其現象を知ることを得るのみと謂ひて、別に吾人には先天的不可知的に、吾人に理性なるものありて、此物が他方より刺激し來る外物を感受し、之を取纏めて一種の形象を作る、此形象が即ち吾人の知識の根本となるものなりと、謂ひたりしが、陽明の道心は方さに此理性と同じらかんか、又雜ふるに人偽を以てする之を人心と謂ふと云へるは、佛に所謂心を生じ、念を動かし、有無長短彼我能所等の心あるものに當り、其人偽とは即、心念を動かし、有無長短を争ひ、彼我を區別し、積極的に自己の利益を計る所の私心を指すなり、此私心あるものを人心と云ふなり、而して朱子は道心人心を區別して、二元となせるも、佛と陽明は之を二元とせざりしなり、尙ほ此人心道心一元に付、大乘起信論には之を真妄一體として説て曰

く、如大海水因風波動、水相風相不相捨離、而水非動性、若風止滅動相則滅、濕相不壞故、如是衆生自性清淨心、因無明風動、心與無明俱無形相、不相捨離、而心非動性、若無明滅相續則滅、智性不壞故、此文に依り、人心道心の一元を解釋するときは、水は道心なり、水に波動なき如く、道心には私欲擁蔽の紛雜なし、併し乍ら水が風を得るときは、波を起し、玆に風相を生ずると同じく、道心も私欲情念の風を得るときは、即ち玆に妄心を起し、無明の人心を生ず、然れども水は波を起し、風相を生ずるも、之が爲めに水の性を變ずることなし、故に風止むときは元の靜水となる、而して風の爲めに波あるも、其波は水を離れて存在せず、波と水とは同物にして、水は水とし、波は波として並び立たず、陽明が人心の正を得たるものは、即ち道心、道心の正を失ひたるものは、即ち人心なりと謂へるは、即ち此意に外ならざるなり、

陽明が心を説くの本思想は、人欲を離れたる清淨無垢の先天的、心生活の状態を以て、基本とせることは以上の如し、然らば此先天的、心生活の状態が如何にして、吾人人類社會の交際上に於て、其正鵠を得て人類社會の道德を維持し、且つ最も望むべく最も賞すべき共同生活の状態を維持し得べきや、此の大問題に對しては、彼は

實に彼が知行合一論を以て之を解釋せんと試みたるなり、此知行合一は、第三編に於て論述すべきを以て茲に贅せず、唯茲に少しく論述し置かざる可からざるは、彼れが根本思想たる人欲を離れたる清淨無垢の先天的心性が、外物に接觸するに當り、如何に心得べきやの點、是れなり、之に對しては彼れ曰く、人惟不知至善之在吾心而求之於其外、以爲事事物物皆有定理也、而求至善於事事物物之中、是以支離決裂、錯雜紛紜、而莫知有一定之向、今焉既知至善之在吾心、而不假於外求、則志有定向、而無支離決裂、錯雜紛紜之患矣、無支離決裂、錯雜紛紜之患、則心不妄動、而能靜矣、心不妄動、而能靜、則其日用之間、從容閒暇、而能安矣、能安、則凡一念之發、一事之感、其爲至善乎、其非至善乎、吾心之良知自有以詳審精察之、而能慮矣、能慮、則擇之無不精、處之無不當、而至善於是乎可得矣、此語たる彼れが大學の「知止而後有定、定而後能靜、靜而後能安、安而後能慮、慮而後能得」と謂へる文を、解説したるなり、此解説たる、彼の朱子派の善を事々物々の間に求むることを非認して、説ける言にして、即ち其意は善は先天的に吾人の心に具有せる善なり、此具有せる善を發揮して事々物々に當る、故に其善たる事々物々の善にあらすして、吾人の心に先天的に具有せる善なり、吾人の心に先

天的に具有せる善なるが故に、事々物々に當るも吾心の儘にして、少しも不可なる所なし、吾心の儘にして、少しも不可なる所なきを以て、其志常に一定して、外に善を求むるの要なし、其志一定して、外に善を求むるの要なきを以て、從て支離決裂、錯雜紛紜の患なく、心常に寧靜にして、動かさず、心常に寧靜にして、動かざるを以て、日用の間、從容閒暇にして、能く安し、能く安ければ、審理密察して、用行含藏の間、能く其所を得て、至善にあらざることをなしと云ふにあり、而して彼れは此根本の思想を實行する方法として、日常行住の間に於て、常に心の善を存し、其光りを害せざらんことを期せり、即ち曰く、靜時も念念人欲を去り、天理を存し、動時も念念人欲を去り、天理を存し、寧靜不寧靜に管せずと、

右思想を佛教に求むるに、佛教の權實の二智或は根本後得の二智とも謂へるに相當せん、即ち眞如法性の理性を悟るを實智或は根本智と謂ひ、世俗の事相即ち宇宙の森羅萬象假有萬差の事相を悟るを權智或は後得の智とも謂ふなり、無性攝論に閉目開目の譬喩を引けり、即、若し人目を閉づれば、宇宙間に非布する萬象は混然として消へ、唯一點の皎皎たる靈性を感得するのみ、然るに忽ち目を開けば、萬象森然

として羅列し、一物一法も缺くる所なしと然れども此二智は、區別すべきものにあらずして根元の先天的・一智あるのみ、故に唯識論には、二智其體は一隨用爲二とあり、畢竟眞如平等の理性を本原として、萬有差別の事相作用を現出するも、其原と一心にして、此一心は即ち佛心或は眞心なれば、此眞心を其儘に發現すれば即ち佛なり、彌陀なり、如來なり、聖人なり、君子なり、尙ほ他言を以てすれば、眞如法性の理を悟るは、根本智にして之を眞諦知と稱し、世俗萬差の事相を悟るは、後得智にして之を俗諦知と稱し、此二諦知を證得するものを以て悟者と謂ひ、達人と稱す、如上眞智權智或は眞諦俗諦と云ふも、根本の一心流布して作用を爲すに外ならざるを以て、之を一言にて言ひ現はすときは、唯心所現なり、釋迦一代の說法、畢竟唯心所現に外ならず、既に眞知と謂ひ、權智と謂ひ、眞諦俗諦と謂ふ、皆な唯一の心が所現して其名をなすものとすれば、此一心社、研究して其所在を求むべきなり、然るに此一心は事々物々に存在するにあらずして、實に吾人が身内に在りて、未だ會て一瞬間も吾人の所領を去りしことなし、既に吾人の身内のものとして吾人を離れざるものとすれば、吾人は何にも外に向つて求むべきなく、此心は靈昭明覺にして、混然至善、而して

宇宙萬差の事相に透徹して明皎々たり、佛教は此心を悟るを以て佛と名け、聖者と名く、陽明の所謂至善を吾心に求めて外に求むるに假らずんば、則ち志定め向ふあり、而して支離決裂錯雜紛紜の患なし、支離決裂錯雜紛紜の患なければ、即ち心妄りに動かさずして能く靜なり、心妄りに動かざれば、日用の間從容間暇にして能く安し、能く安ければ、審理密察能く其所を得べしと謂へるも、右の理を述べたるに過ぎず、兩者共に唯能く唯一の心を説明せるものにして、更に其思想に於て大差あるを見ず、

上述の理由を尙ほ一層明亮ならしめんが爲め、大乘起信論解釋分中、顯示正義の文中を摘録せん、

顯示正義者依一心法有二種門云何爲二一者心眞如門二者心生滅門是二種門皆各總攝一切法其義云何以是二門不相離故心眞如者即是一法界大總相法門體所謂心性不生不滅一切諸法唯依妄念而有差別若離心念則無一切境界之相是故一切法從本已來離言說相離名字相離心緣相畢竟平等無有異變不可破壞唯是一心故名以一切言說假名無實但隨妄念不可得故言眞如者無有相中豈心生滅門者依如來藏故有

生滅心所謂不生不滅與生滅和合非一非異名爲阿黎耶識此識有二種義能攝一切法生一切法云何爲二一者覺義二者不覺義所謂覺義者謂心體離念離念之相者等虛空界無所不偏法界一相即是如來平等法身依此法身說名本覺何以故本覺義者對始覺義說以始覺者即同本覺始覺義者依本覺故而有不覺依不覺故說有始覺又以覺心源故名究竟覺不覺心源故非究竟覺此義云何如凡夫人覺知前念起惡故能止後念令其不起雖復名覺即是不覺故

第三項 易明良知の觀念

陽明の年譜を按ずるに彼が五十歳の時即ち明の武宗正德十六年辛巳の時始めて良知を致すの教を立てたるもの如く記せり而して彼れが此良知の二字を掲出するや彼れ之れに付言して曰く我れ此良知の二字實に千古の聖聖相傳一點の滴骨血なりと又曰く某此良知の説に於ける百死千難の中より得來る已むことを得ず人と一口に説き盡すと雖只恐る學者之を容易に得て把て一種の光景となし玩弄して實落に功を用ゐずして此知に負かんことをと良知の文字を使用するに至れると夫れ或は之を以て嗚失とせるならん然れども彼れが聖學に従事せるより

殊に知行合一を唱道せるより其學問の大綱は心は即ち理なり天下又心外の事心外の理あらんやと謂ひて心を以て根本となし宇宙間の事皆な心に具足するの觀念に依據し且つ修養の功夫としては此心の天理を存し此心の人欲を去るを以て本となせるより考ふれば其心の靈昭明覺の本質を指して良知と謂へる適實なる名稱を付せるに過ぎざるならんか殊に此良知なる文字は孟子既に之を使用せるの好例あるのみならず彼れが知行合一の主張に對しても知行の知は良知を指せるものなることを知ることを得て實に前後照應の妙用あるを以て曾て津津然として之を口に含み未だ言ふこと能はざる所を能く言ひたるが如く欣然として之を迎へたるのみ故に文字は新なりと雖彼れが學問の性質意味に於ては之れが爲めに一の加ふべきものなしと信す唯彼れが使用せる在來の天理なる文字に更ふるに良知なる文字を以てせるに止まるのみ之を詳しく言へば心に具有する天理と謂ふも其天理何物なるやを明らかにせざれば學者をして著落の所を示すに山なきを以て之れに更ふるに比較的恰當なる文字を發見せるにあるのみ要する彼れの良知なるものは心の天理を指斥するに外ならずして良知のために彼の學說

には一の加増あることなく、唯出所ある文字を以て天理を説き、格物致知を説き、知行合一を説くに、稍連繫的便宜を得たるのみ。

余は陽明の知良を説明するに當り、便宜の爲めに之を二に區別すべし、即ち一は其内包の性質を研覈し、二には其外包の性質を明らかにすべし。

(甲) 内延的良知 良知なる文字は、其基く所孟子に出づ、孟子曰く「所不慮而知者良知也」と、孟子の良知なるものは、仁或は道、或は天の道、或は性、或は理と同意義に解したる跡あり、然れども、开は遇ふ所の事に當りて解を下したるものなれば、必とす可からず、其本意は人の慮らずして知る所のものを以て、良知となしたるなれば、利害得失を考ふる暇なく、或は私欲の蔽ひなく、天理の自然に發する是非の心を指斥するなり、而して此自然的是非の心なるものは、慮らずして知り、學ばずして能くす、即ち人心の自然に出づ、故に凡聖の別あることなく、賢愚の間であることなくして、天下古今の等しき所なり、是に於てか彼れ陽明此良知を解して曰く、夫惟有道之士、真有以見其良知之昭明靈覺、圓融洞徹、廓然與太虛而同體、太虛之中何物不有、而無一物能爲太虛之障礙、蓋吾良知之體、本自聰明容知、本自寬裕溫柔、本自

發強剛毅、本自齊莊中和文理密察、本自溥博淵泉而時出之、本無富貴之可慕、本無貧賤之可憂、本無得喪之可欣、感愛憎之可取捨、蓋吾之耳而非良知、則不能以聽矣、又何有於聰目、非良知、則不能以視矣、又何有於明心、而非良知、則不能以思與覺矣、亦何有於容知、然則又何有於寬裕溫柔乎、又何有於發強剛毅乎、又何有於齊莊中和、又何文理密察乎、又何有於溥博淵泉而時出之乎、故凡慕富貴、憂貧賤、欣感得喪、愛憎取捨之類、皆足以蔽吾聰明容知之體、而窒吾淵泉時出之用、如此者、如明目之中而翳之以塵沙、聰耳之中而塞之以木楔也、其疾痛齟逆、將必速去之爲快、而何能忍於時刻乎、故凡有道之士、其於慕富貴、憂貧賤、欣感得喪、而取捨愛憎也、若洗目中之塵、而拔耳中之楔、其於富貴貧賤、得喪愛憎之相值、若飄風浮雲之往來變化於太虛、而太虛之體固常廓然、其無碍也、良知なるものは、太虛と其體を同ふするものなり、太虛の中、何物もあらざるを以て、一物として太虛の障礙たるべきものなし、之と等しく良知は廓然、虛正、其中一物の不正なきを以て、良知の障礙となるべきものは、天下を通じて一物もなし、其體たる聰明容知、寬裕溫柔、發強剛毅、一も備はらざる所なきを以て、少しも外に假るべき所なし、故に富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈

する能はざるなり、欣感、得喪、愛憎、取捨の類、皆以て之が障礙たる能はずして、常に廓然太公、一物の前を遮るなき、萬能自在の體、即ち是れ良知なり、之を余は陽明の内延的、或は内充的、或は動量的良知と稱するなり、即ち次の外延的良知に對して名くるものにして、此名稱あるが爲めに、良知に二ありと云ふにあらす、唯良知の働きを説明するの便を撰びたるに過ぎざるなり、

(乙) 外延的良知 以上の解は、陽明が良知を内延的に解せしなり、其の外延的の方面に於ては、朱本思の、人に虚靈あり、方に良知あり、草木瓦石の類の如き、亦良知ありやと問ひしに、彼れ陽明答て曰く、人的之良知、就是草木瓦石の良知、若草木瓦石無人的良知、不可以爲草木瓦石矣、豈惟草木瓦石爲然、天地無人的良知、亦不可爲天地矣、蓋天地萬物與人原是一體、其發竅之最精處、是人心一點靈明、風雨雷霆、日月星辰、禽獸草木、山川土石、與人原只一體、故五穀禽獸之類、皆可以養人、藥石之類、皆可以療疾、只爲同此一氣、故能相通耳、良知は獨り人類の特有すべきものにあらず、宇宙間に普遍的に具有するものにして、草木瓦石、風露雷日月星辰、禽獸山川土石に至るまで、等しく通有せるものなり、唯人に於て其精英を極むるのみ、要するに彼の

良知と稱するものは、心より廣く、單に有情物のみに有するものにあらすして、非情物も、空間も、日月星辰も、吾人は想像し得べき蒼穹の範圍は、皆な良知充滿の範圍にして、吾人が有に對し、空に對し、想像し得べき限りは、良知も又從て付隨するなり、而して良知は一也、其妙用を以て言へば、之を神と謂ひ、其流行を以て言へば、之を氣と謂ひ、其凝聚を以て言へば、之を精と謂ふ、形象方所を以て謂ふにあらすして、唯其現はる所、發作する所の状態に依りて、其名を異にせるのみ、而して人に取りては、精英の極に達し、妙用自在、慮らずして知り、學ばずして能くす、而して此人的の良知は、即ち是れ直に草木瓦石の良知、草木瓦石の良知は、又是れ即ち人的の良知なり、故に良知は天地萬物一體の良知なりと、謂ふに在るなり、

右述ぶる所の内延的良知を禪に比照するに、禪に於ては、心性と稱し、陽明が内延的良知と同一の解を採るものゝ如し、曰く、此靈覺之性、無始已來、與虚空同體、未曾生、未曾滅、未曾有、未曾無、未曾穢、未曾淨、未曾喧、未曾寂、未曾少、未曾老、無方所、無內外、無數量、無形相、無色象、無音聲、不可覓、不可求、不可以智慧識、不可以言語取、不可以境物會、不可以功用到、諸佛菩薩與一切蠢動含靈、同是大涅槃性、と、彼陽明が良知を以て、昭明靈覺

圓融洞徹、廓然として太虚と其體を同ふするものなりと云へると、右の文に於ける心性の解と何の異なる所あらん、蓋し陽明が良知を以て聰明、睿智、寛宥、溫柔、發強、剛毅、齊莊、中和等の諸徳を具備せるものとせるは、是れ前の禪に於て謂へる、心性の本質を積極的、或は活動的に説明せるものにして、畢竟太虚の性質を詳察せるに外ならざるなり、富貴の慕ふべきなく、貧賤の愛ふべきなく、得喪の欣感すべきなく、愛憎の取捨すべきなしと云へるも、亦太虚の性質を叙述せるに外ならず、讀者此の陽明と禪の兩文を比較熟讀せば、如何に兩者の相同じきに想到するならん、

又彼れ陽明が外延的に良知を陳ふる所將に是れ佛教に謂へる總該萬有の一心即ち所謂普遍的な心性に相當す、總該萬有の一心とは前第一編第二項に於て眞俗二諦を説明せる中、其眞諦即ち眞如の原理が宇宙萬有に普遍的無差別的に充滿して、一事として眞如ならざるはなく、一物として眞如ならざるはなく、人類も禽獸も、草木も金銀瓦石も、日月星辰、山河土壤も、同一眞如の原理に基き、併かも人類の心性も草木瓦石日月星辰の心性も、少しも易はることなく、一體の眞理に合體して、少しも其間に差別なく、畢竟萬有一理に歸極せるものを謂ふ之を理心或は賢實心と云ひ、

其萬有を總該するの一心なるより總該萬有の一心とも謂ふなり、禪に於ては之を主觀的に解して、曰く、山は山、水は水、僧は僧、俗は俗、山河大地、日月星辰、總不出汝心、三千世界都來是汝、箇自己、何處有許多般、心外無法、滿目青山、虚空世界、皎皎地、無絲髮許、與汝作見解、所以一切聲色、是佛之慧目、是れ總該萬有の一心か、宇宙に充滿すると共に、吾人の心性夫れ自體か、宇宙萬有と共に、同一心性を共存、若くは共有するに異ならざるを以て、主觀的に吾人の心性が、宇宙を小形に作り出したる如く、吾人の心性に宇宙の總てを具備するものなりとの見解より出づ、畢竟陽明が外延的良知の説は、佛教の總該萬有の一心に外ならざるなり、

總該萬有の一心なるものは、以上の如く、宇宙を以て一心となすものなり、吾人の心性なるものは、此總該萬有の一心を宇宙萬有と共に共存、若くは共有するに異ならざるの道理なるを以て、彼れ陽明は此道理を利用し、敷衍して、彼れ以前の儒者が、未だ曾て言はざる所を、彼れ能く之を言ひ顯はせり、即ち彼れは吾人の心性が、宇宙萬有の一心と、同一心性なりとの、根本觀念よりして、尙ほ之を詳説して曰く、大人者以天地萬物爲一體者也、其視天下猶一家、中國猶一人焉、若夫間形骸而分於爾我者、小人

矣、大人之能以天地萬物爲一體也、非意之也、其心之仁本若是其與天地萬物而爲一也、豈啻大人、雖小人之心亦莫不然、彼顧自小之耳、是れ唯彼れが片言を記するのみ、彼れが天下の人心を矯正し、人をして完全なる人格或は品性を養はしめんとする、即ち所謂天理を存し、人欲を去り、以て本體の同然に歸らしめんとするの根本思想は、將さに大人小人を論せず、天下の民物に普遍共通なる唯一性、即ち佛教の所謂總該萬有の一心なる觀念に基かざることなし、彼は實に此天地萬物を以て一體となし、中國猶ほ一人の如しと謂へる觀念に基き、獨り完全なる人格を養成し、善良なる品性を鍛冶せんと試みたるのみならず、猶ほ政治を行ふものをして、其軌範を之れに求めしめ、教ふるものをして、之れに據らしめ、學ぶものをして、之れを守らしめ、以て上下、心を一にして各其分を全ふせしめんとせり、是等の消息を知らんと欲せば、讀者幸に陽明が顧東橋に答へたる書中、拔本塞源論と稱するあり、之を熟讀せば、蓋し彼れが眞意を知るに足らんか、併し乍ら陽明が教導の根柢は、將さに如上の點にあるを以て、此根本の觀念は、獨り右の論を讀むときのみならず、彼が書を讀むもの、須臾も忘る可からざる要點なり、余は讀者の意を體し、此拔本塞源論を本編末に付

録す

因みに一言す、佛教にては此總該萬有の一心、即ち理心、若くは實實心を以て、一切衆生の眞心と爲し、此心迷へば、衆生となり、悟れば佛と爲る、迷悟苦樂、一に此總該萬有の一心が、本原となるものなりと説く、之と同時に事心或は緣慮心なるものを説く、即ち自働的なる理心が、受働的なる事物に接觸して、一の和合的、合成的、分別心を生ず、此分別心が事心、又は緣慮心と稱するものにして、此心の思慮分別が、正鵠を得れば、之を善心或は悟心と稱し、正鵠を得ざるときは、惡心或は迷心と稱するなり、

第四項 良知と禪の本來の面目

禪に於ては、善を思はず、惡を思はざる時、本來の面目現前せんと、即ち無心の心と稱するもの是なり、無心の心とは、本心を意味するものにして、彼我の差別、是非の分別もなく、苦樂の思按も何にもなき時の心なり、此心は全身に廣行して、併かも全體に濃厚に、耿々として光りあるもの、此有様に於ける、是非の判斷、善惡の差別が、即ち佛知神知なり、故に佛知、神知と稱するも、常人の未だ曾て有せざる一種異なりたる知

にあらず、吾人が善を思はず悪を思はず、無心の時、本心の現はれて、活動する場合の心を指せるものにて、此心たる是非善惡の差別なき、木石の如き心にあらず、是非善を差別する能力はあれども、善と思ひ是と思ひて固執し、惡と思ひ非と思ひて厭忌する心にあらずして、唯其心の能力が融乎本能的なるを謂ふ、此意味に於ては、如何なる惡人と雖ども、二六時中必ず佛知神知の現前するところあるは疑ふ可らざるなり、若し心が何にか一物一事に停留すれば、心に物が有るとなりて、是非善惡の考慮心を生ず、斯くなるときは、最早無心の状態にあらずして、本心も亦顯はれざるなり、故に禪は此心に物のあるを嫌ひ、善を思はず悪を思はず、無心無念にして併かも眠りたるにあらず、心は心として活動し乍らも、何にも物のなき有様を保持して、之に修養念従を加ふるを教ふるなり、此所を陽明は、念念要存天理、即是立志、能不忘乎此、久則自然心中凝聚、猶道家所謂結聖胎也、此天理之念常存、馴至於美大聖神、亦只從此一念存養、横光去耳、或は又、只要去人欲存天理、方是功夫、靜時念念去人欲存天理、動時念念去人欲存天理、不管寧靜不寧靜、と曰へり、其念人欲を去り、天理を存すと謂ひ、或は念念天理を存し之を忘れず、久しければ遂に美大聖神に至ると謂へる

ものは、是れ皆な心をして無一物ならしめ、以て本然の良心を發現せしむるの方法を説きたるに過ぎず、即ち禪の善を思はず、惡を思はず、善を思はず、惡を思はざれば、心中無一物となり、本來の面目現はれて佛知を生じ、神知を生ずと謂へると、其言は異なれども、其意は同一理を説明せるに外ならざるなり、善を思はず、惡を思はざるは、人欲を去るの方法にして、人欲を去るは善を思はず、惡を思はざるの實果なり、故に他制的に謂へば、人欲を去ると謂ひ、自發的に謂へば、善を思はず、惡を思はずと謂ふことを得、兩者の間、他制的と自發的の差あれども、是れ唯語言の差にして、其實は同一なり、而して人欲を去りたる結果が、心中天理自然に生じ、別に天理を生ずるに勉むるを要せざるなり、之と同じく善を思はず、惡を思はざるの結果が、本來の面目自然に現出し、別に本來の面目を生せしむるを要せず、斯の如く同一事を異語を以て説明したるものたることは、佛の本來の面目を認むると謂へることと、致知との差別及び力行の事に付き、或人が陽明に對して、吾若於不思善、不思惡時、用致知之功、則涉於思善矣、欲善惡不思、而心之良知清淨自在、惟有寐而方醒之時耳、(中略) 欲求寧靜愈不寧靜、欲念無生、則念愈生、如之何、而能使此心前念易滅、後念不生、良知獨

顯而與造物者遊乎」と問ひたるに、陽明答て曰く、不思善不思惡時、認本來面目、此佛氏爲未識本來面目者、設此方便、本來面目即吾聖門所謂良知、今既認得良知明白、即已不消如此說矣。隨物而格是致知之功、即佛氏之常惺惺、亦是常存他本來面目、體段功夫大略相似、但佛氏有自私自利之心、所以便有不同耳。今欲善惡不思而心之良知清淨自在、此便有自私自利將迎、意必心所以有、不思善不思惡時、用致知之功、則已涉於思善之思、孟子說夜氣亦只是爲失其良知之人、指出箇良心萌動處、使他從此培養將去、今已知得良知明白、常用致知之功、即已不消說夜氣、卻是得免後不知守免而仍去守株、免將復失之矣。欲求寧靜、欲念無生、此正是自私自利將迎、意必之病、是以念愈生而愈不寧靜、良知只是一箇之良知、而善惡自辨、更有何善何惡可思、良知之體本自寧靜、今卻又添一箇求寧靜、本自生生今卻又添一箇欲無生、非獨聖門致知之功、不如此、雖佛氏之學亦未如此、將迎、意必也、只是一念良知、徹頭徹尾、無始無終、即是前念不滅、後念不生、今卻又添一箇滅、而後念不生、是佛氏所謂斷滅種性、入於槁木死灰之謂矣。大體に於て佛氏の本來の面目を以て、良知と同一視し、佛氏の常惺惺即ち常に本來の面目を失はざる、有様に在るを以て、格物致知と同一視せり、但佛氏の善を思はず

惡を思はざるは、自ら私し自ら利するの心より出づと成せるに至りては、次項に於て説くが如く、佛教の起りたる所以は、生死を解説するに在るものなることを知らざる可からず、尙ほ讀者右問答の一一に心を注ぎ、相對照して、之を熟讀するときは、玉佛の根據、殆んど異なる所なきを看取することを得べし、

第五項 王禪の不投合

陽明が武宗の使を遣はして、遠く佛教を迎へんとする意あるを聞くと、之を諫めんが爲めに、疏を作り、其中に曰く、夫佛者夷狄之聖人、聖人者中國之佛也、在彼夷狄則可用佛氏之教以化導愚頑、在我中國自當用聖人之道以參贊化育、猶行陸者必用車馬、渡海者必以舟航、今居中國而師佛教、是猶以車馬渡海、雖使造父爲御、王良爲右、非但不利涉、必且有沈溺之患、夫車馬本致遠之具、豈不利器乎、然而用非其地、則技無所施、此言たる誠に以て、否む可からざる所にして、明の天下に君たる武宗にして、唐虞以來貳千有餘年の間、政治の基礎となり、民風徳化の標準と成り來れる、儒教を捨て、俄かに佛氏の教を以て、天下を治めんとす、其非なること火を見るよりも明なる所なり、今少しく儒學と佛教の興起せる基本に付、其異なる所以を述べれば、蓋し思ひ半

ばに過ぐるならん、

抑も彼の唐虞の代、民物簡易、上に堯舜の如き聖王あり、民を見ること、慈母の子に於けるが如く、日夜其心を勞せるものは、民物の慰安發達、民葬物則の調整にありしなり、此民物の慰安發達、民葬物則の調整に對して、其必要を満たさんが爲めに、研究せられたるものは、即ち儒學なり、故に儒學は政治と密接の干係を有し、儒學即ち政治學と稱するも、敢て不可なかりしなり、下つて三代の世に至りても、儒學は政治の根本となり、其地位其任務に變動なきことは、堯舜の代と異ならず、殊に堯舜の遺訓の如きは、儒學中にも萬代易ゆ可からざるものとして、政治の準則となりたるのみならず、一般庶民の相守るべき道德律も亦、儒學に依りて形成せらるゝに至れり、是より下戰國の世、紀綱稍壞敗に傾きたる觀なきにあらざるも、尙ほ未だ政治と道德とは相分離せず、先代因襲の思想は、君郷士太夫を支配し、善政良治と云へば、必ず唐虞三代の治に則るべきものとなし、其觀念は年を経ると共に確實となれり、然れども民衆漸く繁殖し、交通の道開くるに及んで、尙ほ古代の人稀にして、天然物に豊富なる時に行はれし、政治道德は、其儘行はるべきにあらず、之を以て古先聖王の遺訓

遺訓は、直ちに政治の準則たるを得ずして、儒學は稍政治と一致せざるに至れり、是に於てか、儒學は政治に對して特別の位置を有し、之を研究するものを儒者として、特別の待遇を爲すに至れり、以後儒學は政治と分離し、特別の道德上の價值を有するに至りしも、尙ほ政治の良軌範たるの觀念は、少しも變ずるとなく、歴代の帝王皆之を服膺し、以て今日に馴致せるなり、要するに儒學の政治上に於ける價值は、支那に特有にして、亦特別の歴史を有せるなり、天下を平治し、化育を參贊するの道とし、調へば、必ず儒學を措て他に求むべきなきなり、斯の如く儒學の起りし所以より考ふるも、亦其歴史的或は因習の久しきより考ふるも、儒學に代ふるに佛教を以てせんことは、夢想だにも爲し能はざる所なり、右に友して佛教なるものは、天然力の人に及ぼす勢力を、滅せしめんとするの意より出づ、故に其の教理は、天然力の解釋なり、而して天然力の人に及ぼせる勢力の大なるものは、生死にあるを以て、生死を解脱せんとするは、即ち佛教の第一義なり、生死を解脱すれば、總ての苦樂愛憎皆な消滅するなり、貧富榮辱吉凶禍福皆な消滅するなり、生死を悟り、生死を解脱し、生死を以て心を動かさざれば、宇宙は平々坦々た

り、天然力如何に勢力を縦にするも、吾人に對しては、馬耳東風に異ならず、過雁雲行に異ならず、唯我獨尊なり、神なり、佛なり、何物か之に勝るものあらん、是れ佛敎が生死を解脱せんとするを第一義とする所以なり、而して其基く所は、釋迦の宇宙に對する觀察より來たる生死解脱の理論なり、釋迦は死生解脱の理論を見出して、總ての苦惱を一掃し、滿身超脱して、己れを制する他の一物なき別天地に樂在するに至りてより、天下萬衆に之を及ぼさんとして、獻身開導に従事して説き出せるものは、是れ佛敎なり、斯の如く佛敎の目的は、宇宙の勢力に抵抗して、生死を解脱せんとするにあるを以て、儒敎の如く政治に關係することなく、其説たる治國平天下の事にあらざるなり、要するに儒敎は其基源よりするも、又歴史よりするも、治國平天下の要術なり、化育を參贊するの要道なり、反之佛敎は其基源よりすれば、釋迦の宇宙觀及び人生觀の總稱なり、生死を解脱し、一切の苦惱を消滅せしめ、暗を破りて歡樂を充さんとするの要道なり、判然基源を異にし、歴史を異にし、目的を異にす、既に其基源、歴史、目的を異にす、何ぞ兩者の相互に、流用し得るの道理あらんや、故に儒敎の代りに佛敎を用ひ、佛敎の代りに儒敎を用ひんとするも、到底爲し能はざることに屬す、

陽明か彼の武宗か、治國平天下の必要より儒敎を捨て、佛敎を用ひんとするに當り、その不可を諫むる誠に當然なり、其海を渉るに舟航を以てし、陸を行くに車馬を以てするの譬喩、誠に其妙を得たりと云ふべし、然れども其基源、歴史及び目的より之を見ずして、單に抽象的觀察を以てせるは、亦一の缺點なりと謂ふべし、

陽明は其人と問答し、或は意見を叙述し、或は人に教ゆるに當りては、其句調、常に佛敎を排斥せり、其之を排斥するは、蓋し亦排斥するの理由あり、陽明は儒佛の基源、歴史、目的の異なるを見ずして、直ちに二者を對照觀察して、其長短を計らんとするを以てなり、陽明にして儒敎は治國平天下の必要より起りたるものにして、重に世教人道に利あり、佛敎は宇宙の勢力を滅殺せんとするの目的、生死を解服せんとするの目的より起りたるものにして、専ら安心立命を求めんとするに、利あることを知らば、蓋し比較の必要もなく、亦佛を排するの理由も起らざるなり、併し乍ら斯の如き論調を以て、事の是非曲直を斷するの風は、當時一般に行はれし状態にして、陽明のみを責むべきにあらざるなり、蓋し此事たる、學問の分科專攻の行はれざる時に於ては、通例有り勝ちの事にして、獨り支那に於てのみ然るにあらざるが故に、敢て亦

答むべきことにもあらざるならんか、

又或人が釋氏も亦務めて心を養ふ、然るに要するに、以て天下を治む可からざるは何ぞやと、問ひしに陽明答て曰く、吾儒養心未嘗離却事物、只順其天則自然、就是功夫、釋氏卻要盡絕事物、把心看做幻相、漸入虛寂、去了與世間若無此子交涉、所以不可治天下と、この見解は前にも述べたる如く、儒佛二者の基原歴史目的を見ずして、現在説示しある道理を並列して、批評すれば誠に陽明の言、正鵠を得たるものと謂はざる可からず、陽明の此の批評と同一筆法に依りて、彼の熊澤蕃山は左の如く謂へり、曰く

「道體に有、無、中道あり、儒は道體の有也、今の有體を教へ行ふか故也、尤も自然の妙なきにあらず、無と中道を裡とせるなり、老子は無を本とし、有、中を裡とせり、釋氏は有を説き、無を説き、中道を説く、又中にもあらずと説くは、畢竟中を本として、無、有を裡とせり、如何儒は尤も今日形色の上にと雖ども、形色の主たるものは無なり、頑無にあらず、形色なき道なり、其無は神明不測にして、其大、外なく、其小、内なし、東西南北上下中央なし、虛靈不昧なるものなり、是れ道體なり、故に中と云ふ、

形色の主は無也、無の徳は中なり、物あれば則ち則あり、

と元來心なるものは、虚空と同じく、色、聲、香味なし、捕捉するを得ず、然れども、箇體を離れて心なるもの存せざるを以て、儒學は此箇體中、色、聲、香味なき心の活動を有的に説明し、佛は之に反して心の有的活動を無的、太虚的に想像す、而して佛敎の有的活動を、無的、太虚的に想像する所以のものは、佛敎の目的、生死の苦界を出離するにあるが故に、心の箇體的活動或は有的活動を承認する能はざるを以てなり、然れども、絶對に無を説き、無の外何物をも認めざるにあらずして、其無とするは假の無にして、有を離れたる無にあらず、有を離れたる無にあざると同じく、有も亦無を離れたる有にあらず、有と謂へば無を併ひ、無と謂へば有を併ふ、故に畢竟有或は無と謂へる名稱の矛盾を生ずるに至る、是に於てか、有に執し無に執するは正當にあらずとなして、中道を説く、此所を彼れ蕃山は之を看破し、要約して、道體は有無中を含む、儒は道體の有也、無と中道とを其裡となす、釋氏は有を説き、無を説き、中道を説く、畢竟中道を本として、有無を裡とせり」と謂へるなり、陽明が「吾儒心を養ふ未だ事物を離却せず、只其天則自然に順ふ」と謂へるは、即ち色、聲、香味なき心の活動を有的に

見たるものにして、蕃山の儒は道體の有也、無と中道とを其裡とすと謂へると異なるなし、又陽明が「釋氏は卻て事物を盡絶し心を把つて幻相と見做し、漸く虛寂に入り去り了するを要す、故に世間と少しも交渉なし」と謂へるは、即ち心の有的活動を無的太虚的に想像せるを謂ふものにして、蕃山の釋氏は有を説き、無を説き、中道と説く、畢竟中道を本として有無を裡とせりと謂へると異なる所なし、要するに儒學なるものは、前にも述べたるが如く、唐虞三代の世、上に聖王賢王あり、是等のものを治め民を安せんが爲めに設けたる法則が源となり、春秋戰國の世となりて、彼の孔孟の如き偉人出て、己れ其位を得ず、止むなく諸方に遊説し、或は徒を集めて先王の道を講じたるものが、即ち儒の骨子となりたるものにして、専ら世道人心を有形的に鍛冶せんと欲するに出でたるを以て、其説たる有を本とせざるを得ず、而して其基因を見るに於て、無を説き中を説きたるも、其説の多くは宇宙の事相に係れること多きは勿論なり、之に反して釋氏の説は、吾人々類の宇宙より受くる、制裁を脱せんと欲するに出で、即ち宇宙制裁の大なる生死の苦界を脱せんとするに出で、言を換へて云へば有的の制裁を脱して無的の境界に入らんが爲めに起れり、故に無

が其目的なるを以て、其説の多くは宇宙の事相に係ること少し、尙は要約すれば儒は有を本とし、無を控として、時々無によりて誤謬を正し、不明を補ひ、佛は無を本とし有を控として、時々有によりて無の體驗を爲し、無の不足を補ふの状態に在り、所謂ふべし、尙は其兩者の來歴よりすれば、佛敎は昔も今も大體に於て其論據更はる所なしと雖ども、儒學に至りては、彼の宋儒の性理を唱へてより、大に其越きを變じ、其或ものに至りては、佛敎と合一せんとするの傾きあり、殊に彼の象山陽明一派の如き一元論を唱ふるものは、殆んど無を本とし、有をその附屬となすに至れり、故に前に下せる陽明の言は、陽明の批評としては其當を得ず、斯の如く儒佛其本據に先後本末の差異あれども、道統の理を説くに至りては、障礙あるを見ず、何となれば古今數千年、洋の東西を論せず、數多の學者の宇宙觀人生觀を究めんと欲するもの、主觀に偏し、或は客觀に偏すと雖ども、客觀を説かんと欲すれば必ず客觀の對象を要す、見よ彼のライプニツの如き、物質元子のみ存在して他に何物も存在せず、火は火、水は水、木は木の活動を有するも、夫れ自身の元子が活動するものにて、他に一點の之に添ふものなしと云へるが如き、極端なる物質論者さ

へも、尙ほ元子の働きと謂へる無を認めたるにあらずや、又シヨペンハワの如き、宇宙の本體は、意思にして宇宙萬有は意思と謂へる、無形物の活動なりと謂へるが如き、極端なる主觀論者にしてさへも、尙人と物とは現衆世界の物にして、之を作り出すものは、本體たる宇宙の意思なりと謂ひたるにあらずや、之を以て陽明の如きは、有を説かんとして無に入り、遂に無を根據として有を説くに至りたるも、亦佛の如き有を脱せんと欲して無に入り、無を根據として有を説くに至りたるも、亦佛の如くに至りたるも、共に根據とする所は無にあるを以て、陽明の學說の佛に基き禪に採りたるものなることを確むるに於て、何にも支障あるを見ず、唯陽明は有を説かんが爲めに、無を根據としたるものなるを以て、事相を閉却せず、天則自然に従ひたり、之に反し佛は有を脱せんが爲めに、無に根據を採りたるものなるを以て、事物を滅盡し虚寂に入り有とも決せず無とも定めず遂に中道なりと説きたるの差あるのみにして、兩者の牙城とし本營とせる根據無に在るの點に於ては少しも異なる所なし、

答顧東橋書

東橋名璘字華玉

(上略)夫拔本塞源之論不明於天下則天下之學聖人者將日繁日難斯人淪於禽獸夷狄而猶自以爲聖人之學吾之說雖或暫明於一時終將凍解於西而氷堅於東釋於前而雲滂於後、嗚呼焉危困以死而卒無救於天下之分毫也、已夫聖人之心以天地萬物爲一體其視天下之人無外內遠近凡有血氣皆其昆弟赤子之親如莫不欲安全而教養之以遂其萬物一體之念天下之人心其始亦非有異於聖人也、特其間於有我之私隔於物欲之蔽大者以小通者以塞人各有心至有視其父子昆弟如仇讐者聖人有憂之是以推其天地萬物一體之仁以教天下使之皆有以克其私去其蔽以復其心體之同然其教之大端則堯舜禹之相授受所謂道心惟微惟精惟一允執厥中而其節目則舜之命契所謂父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序朋友有信五者而已、唐虞三代之世教者惟以此爲教而學者惟以此爲學當是之時人無異見家無異習安此者謂之聖勉此者謂之賢而背此者雖其啓明如朱亦謂之不肖下至閭井田野農工商賈之賤莫不皆有是學而惟以成其德行爲務何者無有聞見之雜記誦之煩辭章之靡濫功利之馳逐而但使之孝其親弟其長信其朋友以復其心體之同然是蓋性分之所固有而非有假於外者則人亦孰不能之乎學校之中惟以成德爲事而才能之異或有長於禮樂長於政教長於水土播植者則

就其成德而因使益精其能於學校之中。迨夫舉德而任。則使之終身居其職而不易。用之者惟知同心一德以共安天下之民。視才之稱否而不以崇卑爲輕重。勞逸爲美惡。效用者不以爲賤。當是之時。天下之人熙熙皞皞。皆相視如一家之親。其才質之下者。則安其農工商賈之分。各勤其業。以相生相養。而無有乎希高慕外之心。其才能之異者。則安其農工出而各效其能。若一家之務。或營其衣食。或通其有無。或備其器用。集謀并力以求。遂其仰事俯育之願。惟恐當其事者之或怠而重己之累也。故稷勤其稼而不耻其不知。教視與之善教。即己之善教也。夔司其樂而不耻於不明。禮視夷之通禮。即己之通禮也。蓋其心學純明而有以全其萬物一體之仁。故其精神流貫。志氣通達。而無有乎人己之分。物我之間。譬之一人之身。目視耳聽。手持足行。以濟一身之用。目不耻其無聰而耳之所涉。目必營焉。足不耻其無執而手之所探。足必前焉。蓋其元氣充周。血脈條暢。是以痒癢呼吸。感觸神應。有不言而喻之妙。此聖人之學。所以至易至簡。易知易從。學易能而才易成者。正以大端惟在復心體之同然而知識技能非所與論也。三代之衰。王道熄而霸術熾。孔孟既沒。聖學晦而邪說橫。教者不復以此爲教。而學者不復以之爲學。霸者之徒。竊取先王之近似者。假之於

外。以內濟其於私己之欲。天下靡然而宗之。聖人之道。遂以蕪塞。相效相效。日求所以爲富強之說。傾詐之謀。攻伐之計。一切欺天罔人。苟一時之得以獵取聲利之術。若管商蘇張之屬者。至不可名數。既其久也。鬪爭劫奪。不勝其禍。斯人淪於禽獸。夷狄而霸術亦有所不能行矣。世之儒者。慨然悲傷。蒐蕪先聖主之典章法制。而掇拾修補於煨燼之餘。蓋其爲心。良亦欲挽回先王之道。聖學既遠。霸術之傳。積漬已深。而雖在賢智。皆不免於習染。其所以講明修飭以求宜。暢光復於世者。僅足以增霸者之藩籬。而聖學之門。牆遂不復可觀。於是乎有訓詁之學。而傳之以爲名。有記誦之學。而言之以爲博。有詞章之學。而侈之以爲麗。若是者。紛紛籍籍。羣起角立於天下。又不知其幾家。萬徑千蹊。莫知所適。世之學者。如入百戲之場。譁譁跳踉。騁奇鬪巧。獻笑爭妍者。四面而競出。前瞻後盼。應接不遑。而耳目眩昏。精神恍惚。日夜遊遊。洩息其間。如病狂喪心之人。莫自知其家業之所歸。時君世主。亦昏迷顛倒。於其說。而終身從事於無用之虛文。莫自知其所謂。間有覺其空疎。謬妄支離。牽滯而卓然自奮。欲以見諸行事之實者。極其所抵。亦不過爲富強功利五霸之事業而止。聖人之學。日遠日晦。而功利之習。愈趨愈下。其間雖嘗警惑於佛老。而佛老之說。卒未能有以勝其功利之心。雖又曾折衷於群儒之論。終亦未能有以破其功利之見。蓋至於今。功利之毒。淪浹於人

之心體而習以成性也。幾千年矣。相矜以知。相軋以勢。相爭以利。相高以技能。相取以聲譽。其出而仕也。理錢穀者則欲兼夫兵刑。典禮樂者又欲與於銓軸。處郡縣則思藩臬之高。居臺諫則望宰執之要。故不能其事則不得以兼其官。不通其說則不可以要其譽。記誦之廣。適以長其敖也。知識之多。適以行其惡也。聞見之博。適以肆其辯也。辭章之富。適以飾其僞也。是以卑襲稷契所不能兼之事。而今之初學小生。皆欲通其說。究其術。其稱名借號。未嘗不曰。吾欲以共成天下之務。而其誠心實意之所在。以爲不如是。則無以濟其私。而滿其欲也。嗚呼。以若是之積染。以若是之心志。而又講之以若是之學術。宜其聞吾聖人之教。而視之以爲贅疣。桀鑿則其以良知爲未足。而謂聖人之學爲無所用。亦其勢有所必至矣。嗚呼。士生斯世。而尙何以求聖人之學乎。尙何以論聖人之學乎。士生斯世。而欲以爲學者。不亦勞苦而繁難乎。不亦拘滯而險難乎。嗚呼。可悲也。已所幸天理之在人心。終有所不可泯。而良知之明。萬古一日。則其聞吾拔本塞源之論。必有惻然而悲。戚然而痛。憤然而起。沛然若決江河。而有所不可禦者矣。非夫豪傑之士。無所待而興者。吾誰與望乎。

第三編 修養論

第一項 序說

尙書の説命中にも傳説、稽首して王に白して曰く、非知之艱、行之惟艱、王忱不艱、允協于先王、盛徳惟説、不言有厭、答と、是れ傳説が殷の高宗の命を受けて、百官を總べ且つ王に政事の良軌を進言せるとき、高宗其言を良しと謂はれたるに對して、説が答へたる言なり、古より知ること易くして、行ふことの艱きは、之を以て知られたり、然るに稍もすれば知ることを費んで、行ふことを第二義となし、徒らに見聞覺知に耽り、或は知は學に屬し、行は學の外、修養に在るが如く考ふるに至りては、誠に憂ふべきなり、之を以て言行一致、或は知行並進と謂へること起り、或は道德實踐の方法を講ずるものあるに至れり、然れども道德なる文字は、文字夫れ自身が實踐の意を有するにも拘はらず、實踐道德なる文字を使用し、而して其文字は遂に普通名詞となりて、誰人も訝まざるに至りては、又一段の憂慮を加ふるものにあらずや、斯の如き弊害を除去すべき必要は、獨り今時に於て起りたるにあらず、何れの時代

に於ても其必要ありて、隨分世の具眼者識者覺者を煩はしたり、然れども其病根を察して理論的に、知と行とを並進せしめ、合一せしめんと試みたるものは、實に其功を彼れ陽明に歸せざる可からず、而して陽明の此知行合一論は、彼れが諸徳涵養の唯一の方法にして、彼れが學問の半部は實に此知行合一に盡したりと云ふも、敢て過言にあらざるなり、而して余は豫め茲に讀者の注意を請はんと欲する一事あり、并は他にあらず、吾人が此社會の一分子となり、國家の一員となりて生存し、己れが需求する總ての物を其分限に應じて之を獲得し、安全に其生を營み得るは、是れ偏に此社會此國家の賜物なれば、此賜物に酬ゆるは吾人が負ふ所の當然の任務なるを以て、此任務に對しては吾人は各其智能を啓發し徳器を成就して、以て大に世益を開かざる可からざる是れなり、然れども右の任務を全ふするには、吾人は吾人の心中に疚しき所あるときは、之に専らなる能はずして、遂に其分限に應ずる任務を全ふするを得ざるなり、而して各自其心中に疚しき所なからんと欲せば、各自の精神の要求する所のものを全ふせしめざる可からず、然るに吾人は常に吾人の精神を解釋せんと勉めつゝあり、其之を解釋せんと勉むるは、吾人が吾人人類の社會

に處して、日日生起する出來事に對し、吾人が豫て吾人の心意に斯くあるべしと期待しつゝある所と、相背馳したる結果を見るを以てなり、而して此日日の出來事と、吾人の心意とを相一致せしめ、相調和せしめんとして、其の必要に迫りて、内に向つて吾人が常に吾人の精神の解釋に、研究を重ねるは、是れ即ち所謂人生問題なり、吾人は既に人生問題を解決し、其分と其の境遇に應じて、稍確實なる根據を得たりとするも、尙ほ其外に吾人の眼前に出沒して、吾人を間斷なく左右する一大勢力あり、此勢力は吾人をして此宇に生出せしめ、或は樂ましめ、或は苦ましめ、遂に吾人をして又消滅に歸せしむ、茲に於てか吾人は又此勢力を解釋して、吾人に如何なる關係を有し、如何なる影響を與ふるものなりやを、定めざる可からざるの必要に迫れり、而して吾人が此勢力を解釋せんが爲めに、研究を重ねるは、是れ即ち所謂宇宙問題なり、此二問題に對しては、古來種々の方面に於て種々の人に依りて解釋を試みられたり、然れども未だ誰人も吾人をしてその要求する所を満足せしむる程の解釋を與へたるものあらず、故を以て今も尙ほ是等の疑問は、難解の問題として、吾人の眼前に頑乎として横在するの有様なり、斯る要求をして充分の満足を與へざるま

でも、現今其需要に應せんと勉めつゝあるもの、倫理、道徳、哲學、宗教、等種々あり、然れども是等を一一研究して、以て漸く其心意を確め、且つは宇宙の勢力の吾人に及ぼす關係の如何にあるべきやを定むるは、是れ容易の業にあらず、さなきだに之を放擲して顧みざるも、亦無謀の人と謂はざる可からず、然らば之を如何にすべきや、學問として研究する人は、歐羅巴に行はれ來りし倫理道徳、或は哲學にても、英米に行はれ來りし倫理道徳、或は哲學にても、又支那日本に行はれ來りし倫理道徳、或は哲學にても、宜し、又宗教の方面にては、耶穌教にても、佛敎にても、神道にても、宜し、其識力の及ぶ限り、誓て其廣きと深きと確實なるを期して、大成を願ふべし、然れども是れ學者の業なり、専門研究者の目的なり、學者にあらず、専門家にあらざるもの、敢て欲待すべき所にあらざるなり、然れども如上の人生問題及び宇宙問題は、苟も人として社會をなして相交り、宇宙の一肉塊として存在する以上は、到底其圍域を脱する能はざるなり、茲に於てか彼の北野天滿宮たる道真にしてすら、觀音を信じ、法華經を誦讀し、南無觀世音菩薩南無妙法蓮華經と稱念し、或は唯一心あり唯一法ありと謂ひ、或は至心一たひ至らば如來誰れが家にか現せざらん」と謂ひたるに

あらずや、又彼の建武中興の偉業を翊賛せる、楠公正成の如き、其意氣衝天の眞武者にてあり乍ら、深く佛敎を信じ、其戰死の前日、港川なる廣嚴寺に入り、明極禮師の「兩頭俱に截斷して一劔天に依りて寒し」との語に感じて死を決し、願くは七たび人間に生れて、以て國賊を殺さんと謂へるに一致し、宗族十六人、從士五十餘人と共に、港川の露と消えたるにあらずや、言ふことは易し、見聞知覺は適、以て辯を肆にするに足るのみ、信するは難し、心に信じて心と一致したる行ひをなすは難し、之を以て徒らに理解を求むるの業とは別事なることを知らざる可からず、茲に於てか人々其安心立命の道を何れかに求めざる可からず、其道多し、人々其好む所を撰ぶべし、敢て何れを是とし何れを非とせざるなり、然れども其道に迷ふて得る所なきは世の常なり、而して現今世に右等の要求に付、紛々の議論あるにも拘はらず、宗教の方面に於ては、禪最も識者の間に用ゐられ、儒の方面に於ては、陽明亦其評高し、然るに此陽明と禪とは、既に述べたる如く、其根本の觀念に於て殆んど同一に歸著するを以て、其修養の點に於ても亦殆ど同一に歸著すべし、故に余は本編に於て陽明が唯一修養の工夫たる知行合一は、佛禪に對して如何なる關係を有し、如何なる契合點を

有するやを論じ、以て世の修養に志すものゝ爲めに、聊か益する所あらんとす。

第二項 知行合一の基因

陽明が知行合一説は其源大學に於て其意を誠にせんと欲する者は、先づ其知を致す。知を致すは物を格するに在り」と云へるより出づ、今前後の干係を知らんが爲めに、大學の文を掲げ見ん、曰く「古之欲明明德於天下者、先治其國、欲治其國者、先齊其家、欲齊其家者、先修其身、欲修其身者、先正其心、欲正其心者、先誠其意、欲誠其意者、先致其知、致知在格物」と、朱子は此知を致すは物を格するに在り」と云へることを解して曰く「欲致吾之知、在即物而窮其理也、蓋人心之靈、無不有知、而天下之物、莫不有理、惟於理有未窮、故其知有不盡也」と、人心の靈、知あらざるなきも之に對して、天下の物も亦理あらざるなし、若し理に於て未だ窮めざる所あれば、即ち知も亦盡さざる所ありと云ひて、知と理とを折りて二物となし、事々物々皆理あるを以て、其事々物々に就て、其理を窮めざる可からずと爲したるに對し、彼れ陽明の向内的、主觀的、唯心的、思想は、心の外に理を認むることを許さず、事々物々皆な理あり、理は事々物々に就て、之を窮めざる可からずと云へるが如き、二元的思想は、全然之を排斥せざるを得ず、是

に於て彼れは知行合一論を首唱し、以て二元論の非なることに勉めたり、其根據夫れ斯の如し、以下順次之を説明せん

第三項 知行合一の觀念

陽明の意は、知は行の主意にして、行は知の終りを指すものなれば、知と行とを折つて二となす可からず、知と云へば行を併せ、行と云へば知を含み、合一不離の關係を有するを以て、之を二物と見る可からず、故に單に知、或は行と謂ふも不可なることなくして、茲に一箇の知を説けば、既に自ら行の在るあり、一箇の行を説く、既に自ら知の在るありて、畢竟知行の本體は、主觀的に一箇の知を盡すのみと謂ふにあり、而して茲に特に注意すべきは、陽明の知の觀念なり、陽明の知なるものは、朱子の知の如く物に對するものにあらずして、彼の所謂良知なり、此良知は前にも述べたるが如く、内延的の意味にては、人の慮らすして知る所のもの、即ち利害得失の干係を離れ、私欲に遠かる所の是非の心にして、天理、或は理性、或は本能と云へると殆んど全一にして、人心の自然に出て、しかも凡聖の別あることなく、賢愚の間であることなく、天下を通し古今に亘たりて、等しく有する所のもの、是れなり、其外延的の意味に

於ては、人心の自然に有する良知は、獨り人の特有すべきものにあらずして、風雨露雷日月星辰禽獸草木山川土石に至るまで、等しく良知を有し、宇宙は殆んど良知を以て充滿するの狀態を有し、恰も佛教に云へる法性、或は佛性、或は眞如と同一の意義を有し、しかも活動的なりとするものは是れなり、然るに三宅文學博士、立花文學士の如きは、陽明の知行の知を以て、普通の知識と云へる語と全一に解せしかども、是れ大に思はざるの甚たじきものならん、陽明も知識と云へる語を用ゐざるにあらずと雖ども、其意義良知と大に異なる所あるが如し、或人知識長進せず如何と問ひしに彼れ曰く、爲學須有本原、須從本原上用力、漸々盈科而進、仙家說、嬰兒亦善譬、嬰兒在母腹時是純氣、有何知識、出胎後方始能啼、既而後能笑、又既而後能識、認其父母兄弟、云々と嬰兒の胎内にあるとき知識なくして、胎内を出て、外物と關係を結ひて、外物の印象が腦裏に映じて、一の寫象となりたるものが、即ち知識なりとするに於ては、彼れが謂へる良知の解と、大に其趣を異にす、即ち彼れの良知は、天然的、普遍的のものなるも、知識は、后天的、特種的にして、吾人の認識、或は寫象と謂へるものと同一ならん、故に良知は凡聖賢愚に依りて、異なることなし、雖、知識に至りては外物の寫象

の多寡、及び其寫象の相互の關係を認識すると否とによりて、自ら賢愚俗聖の別を生ずるに至る、之れを以て見れば、陽明の知行の知は、三宅立花二氏の謂へる普通の知識と云へる意味にてもなく、亦朱子の所謂事物の理を窮むるが如きものにて、もあらざるなり

次に陽明の行と謂へることの性質を一言せざる可からず、道德上のことは、人間の行爲を研究するに止まらず、其品性も亦其研究の目的物なり、然らば行と謂へるは此二者を包含するか、又行爲のみを意味するか、陽明は行と謂へることに、一定の解を與へたるものなしと雖、彼れが全體の思想よりすれば、獨り行爲のみならず、品性も亦行の中に包含せるものたることは、彼れが學說に於て、知は精神界の總ての活動を包含し、行は知の活動の外面に於ける、總ての徵候を包含するものたるを知らば、明亮なりとす、故に此事は茲に證據立つるに及ばず、彼れが奮を手にせられたる人は、必ず首肯するに躊躇せざる所なるも、讀者幸に下の第五項未段と並讀せば、蓋し之を知るに易からんか、

彼は知行を合一して一箇不離のものとなすに付、大に苦心せり、之を天下後世に明

かにせんとして、大に盡せりと謂ふべし。今左に彼れが知行合一に於ける解の一二を掲記せん。

知是行的主意、行是知的功夫、知是行之始、行是知之成、若會得時、只說一箇知、已自有行在、只說一箇行、已自有知在、古人所以既說一箇知、又說一箇行、者、只爲世間有一種人、體々懂々の任意去做、全不解思惟省察也、只是冥行忘作、所以必說箇知、方纔行得是、又有一種人、茫々游々、懸空去思索、全不肯著實躬行也、是箇描摸影響、所以必說一箇行、方纔知得真、此是古人不得已、補偏救弊的說話、若見得這箇意時、即一言而足、今人卻就將知行分作兩件去做、以爲必先知了、然後能行、我如今且去講習討論、做知的功夫、待知得真了、方去做行的工夫、故遂終身不行、亦遂終身不知、此不是小病痛、其來已非一日矣、某今說箇知行合一、正是對病的藥、又不是某鑿空杜撰、知行本體原是如此、今若知得宗旨時、即說兩箇亦不妨、亦只是一箇、若不會宗旨、便說一箇亦濟得甚事、只是閒說話、

知之真切篤實處、即是行、行之明覺精察處、即是知、知行工夫、本不可離、只爲後世學者、分作兩截用功、失卻知行本體、故有合一并進之說、真知即所以爲行、不行不可謂之知、(中略)夫物理不外於吾心、外吾心而求物理、無物理矣、遺物理而求吾心、吾心亦何物邪、心之體

性也、故有孝親之心、即有孝之理、無孝親之心、即無孝之理矣、有忠君之心、即有忠之理、無忠君之心、即無忠之理矣、理豈外於吾心邪、晦菴謂人之所以爲學者、心與理而已、心雖主乎一身、而實管乎天下之理、理雖散在萬事、而實不外乎一人之心、是其一分一合之間、而未免已啓學者、心理爲二之弊、此後世所以有專求本心、遂遺物理之患、正由不知心即理耳、夫外心以求物理、是以有闕而不達之處、此告子義外之說、孟子所以謂之不知義也、心一而已、以其全體惻怛而言、謂之仁、以其得宜而言、謂之義、以其條理而言、謂之理、不可外心以求仁、不可外心以求義、獨可外心以求理乎、外心以求理、此知行之所以二也、求理於吾心、此聖門知行合一之教、吾子又何疑乎、

第四項 知行合一と一元論

朱子が大學の致知格物を解して、吾の知を致さんと欲するものは、物に就て其物の理を窮めざる可からず、蓋し人心の靈は其元と知らざることなきも、天下の物も亦各定理ありて、此定理を窮めざるときは、其元と知らざることなき心も、亦盡さざる所ありて、全體大明らかならず、故に人は其已に知る所の理に因りて、益之を窮め、以て其極に至り、之を擴充探討し、力を用ゆること久ふして怠らざれば、事物の表裏

精粗明らかならざるなく、遂に大人君子或は聖賢に達することを得べしとなしたるは、彼れ朱子が二元論者たるの自然の結果にして、心の外に、之に對して物、或は物理を認むる以上は、心が物に及ぶ干係は、到底之を非認するを得ざるなり、是れ朱子が事々物々、定理ありとなし、以て其事物の理を窮至して、其極所の至らざるることなからしめんと欲するの方面と、己れの知を推極して盡きざることなからしめんと欲するの方面とを折りて、二件となし、以て二元論を貫徹するに至らしめたる所以なり、而して既に知を研磨すること、物理を研磨すること、を、二件となす以上は、知と物と對立することとなり、従て吾人の知が、物の上に活動して、有形的に吾人の行となるに至れるものなるを以て、知と行も亦之を分たざるを得ざるは、自然の勢にして、如何ともする能はざるなり、之に反して、陽明は知を致すは、吾心の良知を致すなり、吾心の良知は天理なり、致すは事々物々に致すなり、故に吾心の良知の天理を、事々物々に致せば、即ち事々物々皆な其天理を得、而して吾心の良知を致すは、致知なり、事々物々皆な其理を得るは、格物なり、是れ心と理とを合して一となすなりと、心と理とを合して一となす以上は、事物の理を研磨するは、知を致す所以にして、

て、吾心の良知を究むるは、即ち物を格する所以なり、故に格物致知は唯一件なり、之を主觀的に云へば、致知にして、客觀的に云へば格物たるの差あるのみ、既に心と物とを一件となす以上は、吾人の知が、物の上に活動して、有形的に吾人の行となるも、其行は知の一作用たるに過ぎずして、畢竟知と行とは、合一不離の一件となる、故に彼れ陽明が知行合一を唱ふるは、彼れの一元論の自然の結果より出づるもの、亦勢の然らしむる所なり、

右の如く、朱子の二元論に於ては、心と理とを兩事となし、従て知と行とを、兩件となす、之に反して陽明の一元論に於ては、心と理とを一事とをし、従て知と行とを、一件となす、此點は朱子派哲學と、陽明派哲學とを區別すべき、最重要の點にして、多數の異論も、是れより生ずるもの多ければ、讀者にして、朱陽二派の差を知らんと欲せば、豫め此點を承知せられんことを望む、此點を知りて、二派の書を比較熟讀せば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん、

第五項 陽明の知行と禪の心性の活動

佛家殊に禪に於て説く所の心性の活動、即ち本來の面目を現前すると云へるもの

は、其性質本來一箇なれども、觀察の方面に於ては二あり、即ち一は限身的にして、一は萬有的なり、限身的に於ては、吾人は無始以來不生不滅の靈性を有す、此靈性は即ち吾人の心性にして、此心性は自性清淨活動無礙なりと爲す、即ち傳燈法師は之を詳説して曰く、大なる哉心乎、天の高き極む可からず、而るに心は天の上に出づ、地の厚き測る可からず、而るに心は地の下に出づ、日月の光は隠ゆ可からず、而るに心は日月光明の表に出づ、大千沙界は窮む可からず、而るに心は大千沙界の外に出づ、其れ太虚乎、其れ元氣乎、心は即ち太虚を包て元氣を孕む者なり、天地我を待て覆載し、日月我を待て運行す、四時我を待て變化し、萬物我を待て發生す、大なる哉心乎、吾已む之を得ず、強て之を名く、是れを最上乘と名け、第一義と名け、亦般若實相と名け、亦一眞法界と名け、亦無上菩提と名け、亦楞嚴三昧と名け、亦正法眼藏と名け、亦般若妙心と名く、是れ限身的心性の活動を述べたるものにして、佛者が生死の苦を脱せんが爲めに、心を推究し、性を推究し、而して其性質の妙用自在なるを知り、宇宙の事、苦樂愛憎總て一心に係るを知り、此一心を能く悟れば、即ち生死を脱し、煩惱を滅し、常住に入り、歡樂に至り、樂土に化することを得るに至り、總ての事、皆な心の反響なら

ざるはなきに至る、斯の如く觀念するときは、即ち迷悟苦樂唯心の現する所、之を華嚴經には三界唯一心或は心造諸如來と説く、畢竟宇宙の森羅萬有は唯心の造る所となる、之を能く悟了すれば、宇宙は我と共に一心なり、一心の外何物もなし、一心即ち宇宙なり、宇宙即ち一心なりと滋念するに至る、而して斯く滋念したる心には、何事も繋る所なし、思按もなければ、分別もなく、呼へば直ちにアと答へ、迅雷前に落ち、山岳崩壊し、河海沸くと雖ども、一心を動するの憂なく、念々實著、手を擧げ、足を下し、聲を揚げ、目を動かす等、總て心の儘にして、總ての行は心と一致し、心と並進し、心と合一す、君に忠し、父母に孝し、兄に弟すと雖ども、君、父母、兄等の名稱なければ、忠、孝、弟等の名稱も亦あることなし、唯、心の活動の儘なり、心自然に動き、手足身體思慮なくして動き、心と拍子合せて活動す、何れか先きに動き、何れか後に動くか、譬へば手を打ちて聲の出で、石を打ちて火の出づるが如し、手を打ち石を打つが爲めに聲の出で、火の出づるなれども、何れが前か后かを見分け難し、手を打ち石を打つは、知に屬す、聲の出で、火の出づるは、行に屬す、打つと云ふ中に、既に聲の出で、火の出づると云へる因を含むと同じく、心性の活動と云へる中に、常に行を含む、

右は是れ佛に云へる心性の活動、或は本來の面目なり、今之を知行合一に比するに、陽明の知と云ふ中に行と云へることを當然包含するとは前來數次述べたる所に於て、即ち前例の手を打ち石を打つ中に、聲の出で火の出づると全く、良知の活動するに際して、手を舉げ、足を下し、身を動かさず、若くは忠孝弟仁義と云へるが如き、道徳上の名稱ある倫常の因、其中に萌芽し、知らず識らず自然に發現し流出するが故に、何の造作もなし、心の儘が即ち知行合一なり、若し欲心あり、考慮の念あり、利害の念あるに於ては、知と行は合一せず、此場合を陽明は人欲の私に蔽はれて、天性の良知を失ふと謂へり、更に又佛に應無所住而生其心と謂へることあり、是れ即ち知行合一の眞意を示すに、適當の語と謂ふべし、即ち吾人が或事を爲し、或事を爲さざらんと、思按分別すれば、其爲すこと爲さざること、心が止まりて、其事皆な故意の曲事となる、言ひ換ゆれば、知と行と合一せざるなり、併し乍ら心の生ずる所に生ぜざれば、氣も付かず手も行かずして、知行と云ふこと生ぜざるなり、其所に心が生じ乍ら心が夫れに少しも止まることなければ、心と行と一致し、並行し、變轉自在、爲す所皆な道の中を得るに至る、之を佛教には佛とも稱し、菩薩とも稱するなり、普通の語

を以てすれば、大人なり、君子なり、若し物に心が止まるときは、迷ひを生じ、執着を爲し、苦痛をなし、遂に事物に纏綿せられ、萬事皆な滯滞す、即ち凡夫なり、迷人なり、愚人なり、小人なり、斯の如く前後の思慮分別を際断し、心の動かんと欲する儘に放任して、併かも其爲す所、或は爲さざる所に、心が並行し、一致すれば、即ち陽明の所謂、知行合一なり、故を以て知行合一と云へば、陽明に於て、初めて開始せられたるが如く、思考するは誤りなり、其由來する所遠し、蓋し陽明が一元論者として、併かも佛教の變身者として、深く萬物一元唯心唯理を篤信し、宇宙を羅織し、變轉し、應化し、薰育し、陶冶するものは、唯一の理、唯一の心に在りと、立てたる彼れが確信の自然の結果にして、敢て脱兎の見にあらざるなり、

茲に注意し置かざる可らざる一問題あり、即ち行は常に知に併ふべきものにして、知あれば必ず行ありと謂ふことを得べきや否や、是れなり、是れに就ては行の解釋如何によりて大に異なる所あり、故を以て茲に先づ行の性質を研究するの必要を生ず、夫れ行と稱するは、普通の觀念に従ふときは、必ず有形なる身體の運動を意味す、即ち少なくとも筋肉の運動の表現あるを要するなり、然れども余は此觀念を以

て全然許可するを得ず、成程多くの場合に於ては、行には筋肉の運動あるものなれども、彼の將さに爲さんと欲して、手を下さんとする場合、又は現に爲しつゝある場合に、其事の悪なるを知りて、俄かに之を止むる時の如き、前者は未だ手を下さざる中に、其悪なるを知りたるが爲め、遂に筋肉の運動を見ず、後者は其悪なるを知りたるが爲め、現に爲しつゝある筋肉の運動を中止す、普通の觀念にては後者は兎も角、前者の場合は、之を行とせざるが如し、然れども此二箇の場合に於て、若し其悪なることを知らざるに於ては、蓋、前者は運動を始め、後者は運動を繼續するや必然なり、然るに其悪なるを知りたるが爲め、前者は運動を開始せず、後者は之を中止したるものなるを以て、之を亦一種の行と云はざるを得ず、故に余は普通の場合を、積極的の行となし、前例の如き場合を總括して、消極的の行となし、以て行に二種あることを認むるものなり、心理學者は感覺に付て二種を分ち、感覺あるや筋肉の運動を起すもの、感覺あるも筋肉の運動の併はさるもの、二に分ち、其筋肉の運動を起さざる場合に、腦の把住力と云へることを説明す、然れども之れ心象作用を、科學的に説明したるに止まり、道德論として論述する場合に、直ちに之を適用するを得ず、彼の知

行合一論の如き、陽明が修身齊家人格の養生等、總ての道德上の諸徳、涵養の唯一の工夫論として唱へたるものに對しては、科學の理論を以て、直ちに之を非難するを得ず、抑も道德論は善惡の標準論なり、人倫五常の實論なり、人類共存の融合論なり、心理を發見し、心情を調整することも要用なりと雖ども、其主たる目的は實踐を求むるにあり、是れ普通の科學研究と、大に其趣を異にする所以にして、兩者に同一筆法を採ること能はざるは、又止むを得ざる所なり

第六項 知行合一と坐禪

知行合一は、陽明が諸徳涵養の工夫論なり、坐禪は禪家が心性實現、識心見性、本來の面目を現はして、無量の功徳を得、盛大流行の聖者とならんとするの工夫論なり、此二者の工夫論たる、一見何等の關係なきが如くなれども、其源に溯り、深く其理由を究むるときは、意外に密接の關係を有し、何等か必ず契合あることを信せしむ、彼れが龍場に誦せられ、困憊厭苦の餘、心を動かし性を忍び、深く佛教の眞理を體驗し、傍ら之を孔孟の教に比照し、以て安心立命を求めたり、彼れが此位地機會は、彼に於て實に佛教體驗の天恵なりしなり、彼れは此時に至るまで一定の宇宙觀及人生觀を

有せざりしなり、今之を彼れが經歷に徴するに、彼れは當時の状態に就て、實に左の如く謂へり、曰く、守仁早歳業舉溺志詞章之習、既乃稍知從事正學、而苦於衆說之紛擾、疲憊茫無可入、因求諸老釋、欣然有會於心、以爲聖人之學在此矣、然於孔子之教、間相出入、而措之日用、往々缺漏無歸、依違往返、且信且疑、其後謫官龍場、居夷處困、動心忍性之餘、恍若有悟、體認探求、再更寒暑、證之五經四子、沛然若決江河、而放諸海也、と、其の之を五經四子に證するに、沛然として江河を決して、海に放つが如しと云へるものは、老釋の眞理を以て、眼を五經四子に注ぎしなり、老釋の意を以て五經四子を解せしなり、而して其沛然として江河を決するの感ありしは、固より二者契合する所ありしならんも、其重なる原因は、彼れが自白する如く、彼が龍場に謫官せられ、夷に居り困に處し、身命の危きに瀕して、己れが心をして、如何なる所に住ましめ、己れが身をして如何に所置すべきやに付、深く思ひを焦せり、然れども當時尙ほ未だ一定の信向を有せず、茲に於て彼が會て學び得たる、佛教の道理を以て、實際に體驗を試みたるの結果に因らずんば、あらず、是れ既に禪に所謂一種の坐禪なり、禪定なり、陽明の如きは少にして、氣鋭、世に處する頗る多角的に、且つ何事にも勝心なりしなり、然れど

と假令大事に當りて、禍福死生を忘れて、驚天動地の極大事業を成就する英傑の士と雖ども、逆境に立ち天一点の自由を許さず、空しく困厄に陥るときは、茲に禍福死生に惑ふに至る、陽明の如き其意金鐵の如く、其氣衝天の慨ありて、一世を吞むと雖ども、一たび身を蛇虺魍魎の地に投するや、往日の風光を失ひ、初めて禍福死生に惑ふに至りしなり、而して彼れが心を動かし、性を忍ぶの餘、恍として悟る處あるが如しと、謂へるもの、佛の死生に對する道理と、現在の困厄とを對照して、初めて其虚ならざるを悟りしなり、其虚ならざるを悟りてより、深く其道理を體認し、回光返照の安樂地を求めたるなり、彼れが體認探求再更寒暑と謂へるもの、是れ即ち回光返照の功夫、識心見性の方法を實踐せるものにして、禪に所謂坐禪なり、夫れ坐禪なるものは第一編にも述べたるが如く、夫自身が安樂の法門なり、大道を究盡するの修證なり、尋常其法ありと雖ども、行も禪、坐も亦禪、語默動靜に拘はらざるなり、只其要は心意の上にあるなり、心意如何にすべきか、即ち身心を放捨して自在ならしめ、萬事を休息して善惡を思はず、是非に管せず、心意識を停め、念想觀の測量を止めて、己れ聖者たらんことを願はざるにあり、彼れ陽明が年少より氣鋭に、多角的に、勝心に、心

猿意馬に、總ての英傑たるの資性を備へ乍ら、轆轤落魄、四圍の事物、總て己れを囚しましむる資料とならざるなく、殆んど絶望の境に至り、極端より極端に轉じて、初めて他働的に、如上回光返照の工夫たる坐禪の作事を行修せしなり、之を以て余は陽明は、知らず識らすの中に、彼れ自ら實質的の坐禪を行修せるものなりと、稱するなり

今右論述せし所を彼れ陽明が年譜に就て見るに實に左の如く記せり、

先生三十七歳在貴陽春至龍場、先生始悟格物致知、龍場在貴州西北萬山叢棘中、蛇虺麴黷、蟲毒瘴癘、與居夷人、鸞舌難語、可通語者皆中土亡命、舊無居始教之範、土架木以居、時瑾憾未已、自計得失榮辱、皆能超脫、惟生死一念、尙覺未化、乃爲石墀、自誓曰、吾惟俟命而已、日夜端居澄默、以求靜一、久之胸中灑々、而從者皆病、自取薪取水作糜飼之、又恐其懷抑鬱、則與歌詩、又不悅、復調越曲、雜以談笑、始能忘其爲疾病、夷狄思難也、因念聖人處此更有何道、忽中夜大悟格物致知之旨、寤寐中若有人語之者、不覺呼躍、從者皆驚、始知聖人之道、吾性自足、向之求理於事物者、誤也、(下略)

先生三十八載提學副使、席書聘主貴陽書院、是年先生論知行合一、(下略)

佛者が坐禪の結果が識心見性或は見性成佛なるが如く、陽明の坐禪の結果が知行合一なり、前第五項に於て述べたるが如く、生死を解脱し、煩惱を滅し、常住に入り、歡樂に至り、樂土に化することを得るに至れば、宇宙は吾と共に一心となり、一心の外何物もなきに至る、一心の外何物もなければ、思按も入らず、分別も要せず、呼へば、と答へ、手足身體、心と拍子合せて活動するに至る、陽明の知行合一も、亦是れに全じ、即ち陽明が大學の格物致知を解して、事々物々皆な其理を得るは格物なり、我の良知の天理を、事々物々に致すは致知なり、而して事々物々皆な其理を得るも、是れ事々物々の理にあらずして、我心に於ける良知の天理に外ならずとなし、又格物致知の功夫は、動時も念々人欲を去り、天理を存し、靜時も念々人欲を去り、天理を存するにありとなす、其人欲を去るものは天理を存するの所以、天理を存するものは人欲を去る所以にして、人欲の私を去るときは、我心に何物もなし、唯天理のみ存するなり、天理とは無心の謂なり、無心とは頑無心の謂にあらず、無心の心を謂ふなり、澤庵禪師の「無心の心と申すは、本心と同じことにて、固より定まりたることなく、分別も思案も何にもなき時の心、總身に廣がりて、全躰に行き渡る心を無心と申すなり、何

處にも行かぬ心なり、石か木かの様にてはなし、留る所なきを無心と申すなり、留まれば心に物があり、留まる所なければ心に何にもなし、心に何にもなきを無心と申し、又無心無念と申候、と謂へるものは是れなり、坐禪は善を思はず惡を思はずして無心となるべきを勉め、陽明は人欲を去りて、天理の無心に歸することを勉む、故に知行合一と謂ふは、人欲を去りて天理の儘なる人の心身運動の状態を、直視的に言ひ現はしたる名稱たるに過ぎず、道理は斯の如く簡單明亮なり、然れども之を實行するは難し、禪に於て見性成佛、本來の面目を現はすが爲めに、九年面壁の功を積むの要あるが如く、陽明の知行合一も亦易事にあらざるなり、陽明曰く、某良知の説に於て、百死千難の中より得來る、是れ容易に此に見得し到れるに非らず、此れ本と是れ學者の究竟話頭、止むを得ず人と一口に説き盡すのみと、誠に坐上の空論にあらず、人欲を去る易きが如し、天理を存する亦易きが如し、然れども心中無一物となり、天理の自然を事々物々に致す、實に百死千難の中より來るものたるを知らざる可からず、陽明が夷に居り困に處して、初めて體驗し得たるもの、而して一時に止まらず、動時も靜時も、其實なかる可からず、茲に於て大に知行合一を疾呼するの要あり、豈

に過雁雲行視するを得んや、
右陳述する所を以て、余は陽明の人欲を去り天理を存するに心を用ゆるは、禪に於ける一種變態の坐禪法なることを認む、而して其知行合一と謂へるは、坐禪に依りて得たる身心運動の状態を、直視的に言ひ現はしたる名稱に過ぎずして、禪語を以てすれば無心なり、故に禪の無心となるの功夫は、陽明の人欲を去り天理を存するに在りて、陽明の知行合一の功夫は、即ち禪の善を思はず惡を思はず、同光返照の本地を求めんとする坐禪に在りと謂ふことを得べしと信ず、知るべし、彼れ陽明が年譜に於て、三十七歳にして、竜場に在り、佛教體驗の機會を得て、三十八歳に至り、此年初めて知行合一を論じたることを、

第四編 死生觀

第一項 儒學の死生觀

儒學の方面に於ては、孔孟を始め許多の學者輩出すと雖、死に對しては直接に之を説くものなし、季路の鬼神に事ふるを問ふに、孔子答て曰く、未能事人焉能事鬼と季路又死を問ふ、孔子曰く、未知生焉知死と謂へるが如き、故らに死の問題を避けんとするの跡あり、然れども間接には、彼れが死に對して如何なる觀念を有したりしやを知るに難からず、其死生有命富貴在天と謂ひ、朝聞道夕死可矣と謂ひ、志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁と謂へるより推測すれば、彼れは死の人生に免る可からざることを、其時期の不可抗なる力なることは、夙とに之を體念せるもの、如し、畢竟此問題は、人智の解決し能はざるものとして、襲來するが儘に、自然に放任せるものならん、而して之が研究を避けたるにも拘はらず、甚だ之を重視したるは、彼れが志士仁人生を求めて以て仁を害するなし、身を殺して以て仁を成すことありと、謂へるによりて明かなり、此言たる彼れが死を重んじたることを知るを得ると同時に、

死の重きより尙ほ一層重き仁なるものあることを知るに足る、茲に於てか仁の性質を一言せざる可からず、孔子の仁を謂へる一様ならずと雖、蓋し中庸に仁者人也親親爲大、孟子に惻隱之心仁之端也とあるよりすれば、仁は蓋し愷乎たる晴なり、無差別平等の愛情なり、先天的絶對的の徳性なり、其法唯人を愛し、物を愛するにあるのみ、而して此情を以て、天下國家を治むれば、民之に依らざるなく、此情を以て人に接すれば、人之を親まざるなくして、人を化し國を治め天下を化するを得るものたり、然らば彼れは何故斯く仁を重んじたるか、茲に於てか亦彼れが當時に於ける社會の有様を一言せざる可からず、彼の世は春秋とて、諸侯四方に割據し、周は之を統一するの名ありと雖、而かも國國其政治を異にし、相反目し、相攻伐するを以て、事とせり、故を以て社會の秩序紊亂し、教化の道興らず、名分の何たるを知らざるの有様なりし、彼れ之を見て黙する能はず、此弊害を除去し、社會の秩序人格の完成を期し、風俗を矯正せんとするを目的となし、之が爲めに東奔西走魯に生れて齊魯衛曹宋、陳、蔡、楚等拾餘國を遍歴して、各其君に説く、而して其説く所未だ曾て右の目的外に他事を謂はざるなり、故に彼の主義は現世的なり、彼の唱ふる所は實踐的なり、實

踐的現世的のために、彼れは日も亦足らずして、他を省みるに暇あらざりしなり、之を以て、彼れは死生の問題の如き、之を研究するの念なきにあらざりしならんも、是れより尙ほ一層重き、仁のために之を研究するの暇なかりしなり、是等の消息は、彼れが生存時代の歴史に鑑み、且つ論語を通讀せば、蓋し其真相を知るに難からざるならんか、下りて孟子の時に至りては、社會の秩序の紊亂せる、民人の風俗の頹廢せることは、孔子の時よりも甚だしく、諸侯各外は互に攻伐奪掠を事とし、内は民に取りて利を計り、之がために民は塗炭の苦に陥ると雖、敢て之を省みず、其慘憺たる有様、名狀すべくもあらず、孟子は此間に立ちて、社會國家の秩序を正ふし、生民を塗炭の中より救ひ出さんとするを以て、己れが任務となせり、故を以て、彼れも亦孔子と同じく、孔子の跡を尋ねて、其主義とする所は現世的なり、其唱ふる所も亦實踐的なり、眼前の急を救ふを以て事となし、比較的不急なる死生問題の如き、之を思はざるにあらざりしならんも、未だ之を研究するの暇あらざりしなり、然れども彼の時代は、既に人口も増加し、交通も開けて、社會の事物複雑となり、人智も亦進歩して、孔子時代の比にあらず、之を以て孔子の如く仁のみを説て足れりとせず、一層知に屬す

る方面も、亦之を放擲するを得ず、是に於てか、彼れは知に屬する義を説き出せり、彼れは亦主觀的に屬する性を説き出せり、尙ほ彼れは知能を説き、浩然の氣を説けり、是に於て、學問の範圍は擴張せられ、從來實踐的現世的のものが、大に主觀的精神的となれり、

右の如く、死生の事に付ては、彼等は直接に之を言はずと雖、間接に如何なる思想を有したりやを推測するに難からず、彼等は社會を改良し、人心を矯正し、良政治を夢み、人格の完成を夢みて、餘念なかりしも、孔子の如きは、仁を以て宇宙間生生化育の動機、人生の本義となして、死よりも之を重んじ、死の爲めには仁を曲げず、仁を全ふすれば、死生は其作用たるに過ぎずとなして、以て人生の萬事を仁に集中せしめたるなり、而して彼れは天地間生々化育の動機は、仁に在りとなして、別に精靈或は鬼神の如きもの、實在あることを信せざりしなり、孟子の性の善なるを説くや、萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉、或は、人之所不慮能者、其良知也、所不學能者、良能也、孩提之童、無不知愛其親也、及其長也、無不知敬其兄也、親親仁也、敬長義也、無他、達之天下也、と謂ひて、演繹的直說的に、性の善なるを説きたるのみならず、惻悌、憐隱、辭讓、羞惡

の四端を以て、歸納的に性の善なるを説けり、故に其思想は頗る知能的主觀的に進みしも、彼も亦孔子と全しく其救濟せんとする處は、實踐的現世的にありて、性の善なるを認めて、仁義五常を守れば人生の能事盡せりと、信じたるものにて、死生の如きは、天地自然の運行たるに過ぎずと、思意せるなり、要するに孔孟の死生觀は、自然的任他的にして、一に天地の運行、事物の推移變遷する作用に外ならず、別に又精靈神佛の如き、理想的箇躰の實在あることを認めたるの跡を見ざるなり、

孟子が性の善なるを説きたるより、孟子以後の學者、殊に墨子、揚子、告子、荀子等は性の善惡を論難攻撃し、傍ら又別に老子、莊子の如き虛無說、韓非子一派の詭辯家ありて、各其見る所によりて、説を立てたるありて、大に支那の學海を賑はしたり、而して唐末に至り、佛教の侵入せるありて、大に哲學思想を鼓舞せり、然れども孔孟の説は綿綿として絶へず、宋學勃興するに至りて、佛教の影響を受け、漸く宇宙若くは人生の研究を重んずるに至れり、然れども儒者は尙ほ此死生問題に對しては、直接に之が研究をなざりし、今宋儒一般の死生に對する思想を知らんがために、彼の宋學隆興の中心とも謂ふべき、周子の思想を尋ねん、

周子は、大極動て陽を生し、動くこと極つて靜なり、靜にして陰を生ず、靜なること極つて復た動く、一動一靜互に其根となる」と謂ひて、天地の始めを大極に歸し、動て靜に、靜にして陰に、陰にして陽に、而して動靜陰陽極りなきを天地の本體となし、之に次て曰く、陽變し陰合して水火木金土の五氣順布し、四時行はると、陰陽の開合流轉が五行となり、五行(金木水火土)動て四季となるとなし、尙ほ之に次で、陰陽の二氣交成して、萬物を化育し、萬物生々として變化窮りなし、惟人や其秀を得て、最も靈なり、形既に生じ、神發し、五性感動して善惡分れ、萬事出つと、大極が陰陽の二氣となりて萬物を化育し、生々として變化流轉し、人を以て其精を得たるものとなして、遂に易の始を原ねて終に反る、故に死生の説を知ると、謂へるを引きて、大なる哉易や、其れ至れりと、云へるより見れば、彼れの死生に對する思想は、此世界は大極より宇宙森羅を生じ、生々限りなきが如く、生あれば死あり、陰あれば陽あり、靜あれば動あり、夜あれば晝あり、故に天地間、流轉し化育し變遷する理は、即ち生死をも包含せるものなりと、思意せるならんか、

右は周子の死生に對する觀念なれ共、儒學に屬する學者の死生に對する觀念は、大

畧右と大同小異にして、右を以て其一般を推すも、大なる誤なしと知つて然らんか、

第二項 陽明の死生觀と禪の死生觀

陽明も亦儒者なり、彼れは佛禪の理を採り乍ら、尙ほ其言語文字は儒なり、故に彼れが死生に對する態度も、亦一般儒學者と同じく、直接に之を明説せざりし、然れども彼れは孔孟或は宋儒の死生觀よりも、一層正確ならんか、彼れの知行合一を首唱せるは、全く佛禪に採りたるが如く、其死生觀に於ても、亦宋儒の死生觀よりも、一層禪的に傾けるなり、而して彼れの知行合一説は、佛禪の死生觀を玩味するにあらざれば、成効せざるなり、何故に然るか、

陽明の知行の知は良知なること、前編既に之を述べたり、而して其良知は、佛禪に關へる佛知或は神知に外ならずして、真如法性の理性を悟り、森羅萬象假有萬差の事相を悟りたる、真知を指斥せるに外ならざること、前既に之を説述せり、而して禪に於ては、其真知を悟得するに付、善を思はず、惡を思はず、無心に證念せば、本來の面目現前して、佛性を顯はし、佛心を悟り、真知佛知を證得するに至るものとなす、此方法として、坐禪なるものを用ゐて、靜慮悟入の方法となすと雖、是れ畢竟有形的に靜

慮を計り、心地を開發し、本地の風光を現はすの、方法手段たるに過ぎず、換言すれば、識心見性、見性成佛の方法たるに過ぎざるなり、而して本來の面目を見る能はざるは、有に著し、無に著し、生に著し、死に著し、宇宙間一切の事、滿目の形象、總て差別の眼を以て見るが故に、本來自性の佛心を認むる能はざるなり、彼の心は虚空の如し、或は無心は是れ佛なり、或は無心の心を有すべし、或は無心なれば本心生ず、或は無心なれば本跡自然に現す、或は一箇の無心道人を念すべしと謂へるもの、有無生死、限量、定限等の差別心を去り、天地同化、物我同然の本能に歸らしめんが爲めの言たるに外ならず、澤庵禪師は此有心無心に付、説て曰く、有心の心とは、忘心と全しことに、て、有心とは有る心と讀む文字にて、何事にも一方へ思ひ詰むる心なり、心に思ふことありて、分別思案が生ずる程に、有心の心と申候、無心の心とは、本心と全じことにて、固より定まりたることなく、分別も思案も何もなき時の心、總身に廣まりて、全跡に行き渡る心を無心と申すなり、何所にも行かぬ心なり、木か石かの様にてはなし、留る所なきを無心と申すなり、と、陽明が此無心となる工夫として、天理を存し、人欲を去ると云ひ、或は良知を致すと云ひ、或は惟精惟一の工夫をなすべしと云ひ、或

は感らずして能ずる所のものは良知なれば其知に返るべしと云へり、而して其根本の思想を、心即ち理なれば其本来の理に返るべしと謂へるに取る、即ち佛禪の無心なり、本来の面目なり、即ち佛知なり、佛心なり、要するに余は兩者の無心となるの方法手段に於ては、少差なきにあらざるも、其終局の目的が無心となりて、天地萬物一體の同然に返るに在ることは、兩者同一なりと斷言するに於て、少しも疑ひを置かざるなり、

右無心となりたる結果が兩者共に知行合一なり、我身にある心を、爲と本来より能く悟り切り、天地萬物一體の同然に返り、無心となるときは、心は全身に充滿して用の欠ぐることなく、物皆な花、活潑潑地、手の入るときは手の用叶ひ、足の入るときは足の用叶ひ、目の入る時、口の入る時、耳の入る時、鼻の入る時、共に各、其用を足して、餘蘊あることなし、恰も舞を能く舞ふ人の、手足の動くに心を留めず、手足の動く儘に任すと同じきなり、斯の如く無心を主とし、知行合一を主とするときは、死生の問題は茲に天地の運行と異なるとなし、有あれば無あり、陰あれば陽あると同じく、生あれば死あり、晝あれば夜あり、表あれば裏あると同じく、生あれば死あり、生死は天地

運行の問題なり、故に此問題は良知即ち天理、人心即ち佛心にして、天地間行くとして樂土にあらざるなく、唯心の儘なる境界に在住する無心道人、否な知行合一、人事恰も舞を舞ふが如き、聖人君子佛者悟者の敢て、關する處にあらざるなり、彼の佛教にて生死の苦界を解脱して、涅槃常住の悟りを開くと云へるは、正さに此無心の境界にあるものを云ふに外ならざるなり、

参考の爲めに左に陽明の死生に關する一節を掲記せん、

蕭惠問死生之道、先生曰、晝夜即知死生、問晝夜之道、曰、知晝則知夜、曰、晝亦有所不知乎、先生曰、汝能知晝、惜々而與蚤、蚤而食、行不著、習不察、終日昏昏、只是夢晝、惟息有養、瞬有存、此心惺々明々、天理無一息間斷、方是能知晝、這便是天德、便是通乎晝夜之道、而知更有甚麼死生、

終に佛教に於て諸行無常を説き、諸法無我を説き、涅槃寂滅を説き、以て死生の苦界を脱して常住の世界に至らんことを説くと雖、是れ形に執して、容易に無心の境に進む能はざるが爲めに説くものにして、唯自心を觀する方法たるに過ぎずと知るべし、

尙ほ以上述べたる所は、彼れ陽明が知行合一論は、死生を以て、天地の運行に任じて、併かも吾人の精靈、精神、或は神靈をも、天地の大精神、大神靈に合體せしむるの、一大意力を暗示したるものにして、將さに佛禪の死生觀と一致する所あるを述べたるもの、若し夫れ、彼の宇宙は、何時に始まりしや、何時に終るべきや、物質のみなりや、物質の外に神ありや、一神なりや、多神なりや、吾人の精靈は、吾人の身體を離れて存在し得べきや、自立的なりや、他立的なりや、吾人に來世ありや、又未來ありや、等の問題に至りては、本書の範圍に屬せざるを以て、之を詳論せず、故に余は之を他日に期す、併し乍ら、以上諸問題の如く、哲學的研究を重ねるも、余の現下の信する所にては、終局する所、將さに右陽明と禪の思想を以て、一の眞理なりと認めざるを得ざるなり、

陽明と禪(終)

明治三十七年十二月二十二日印刷
 明治三十七年十二月二十五日發行

陽明と禪奥付

定價金參拾錢



著者 里見常次郎

發行者 大葉久吉
東京市日本橋區本石町三丁目十七番地

印刷者 三島宇一郎
東京市神田區表神保町二番地

印刷所 同所
〔電話本局三三二六番〕
 弘文堂

發兌元

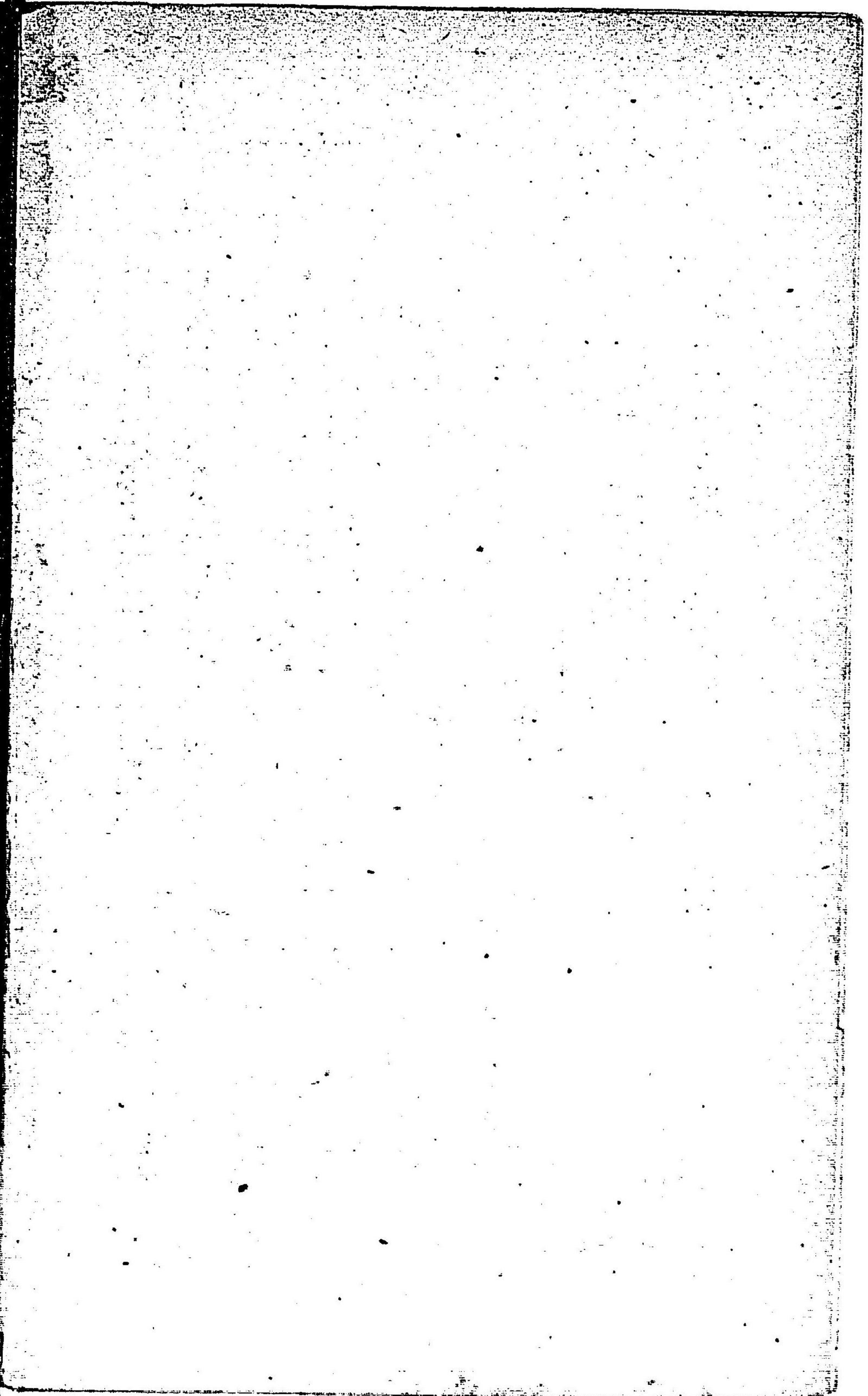
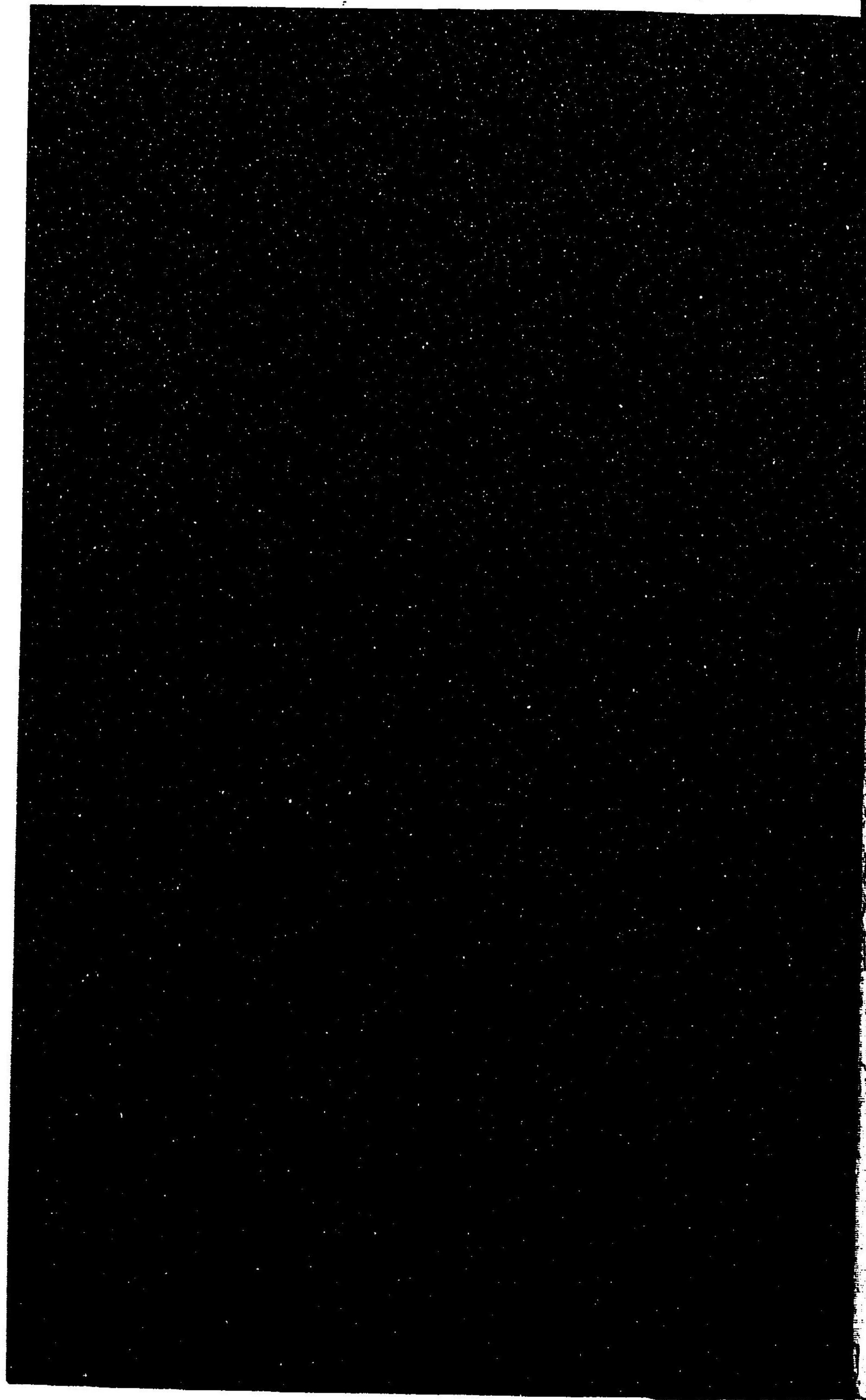
東京市日本橋區本石町三丁目
 大阪市東區備後町四丁目

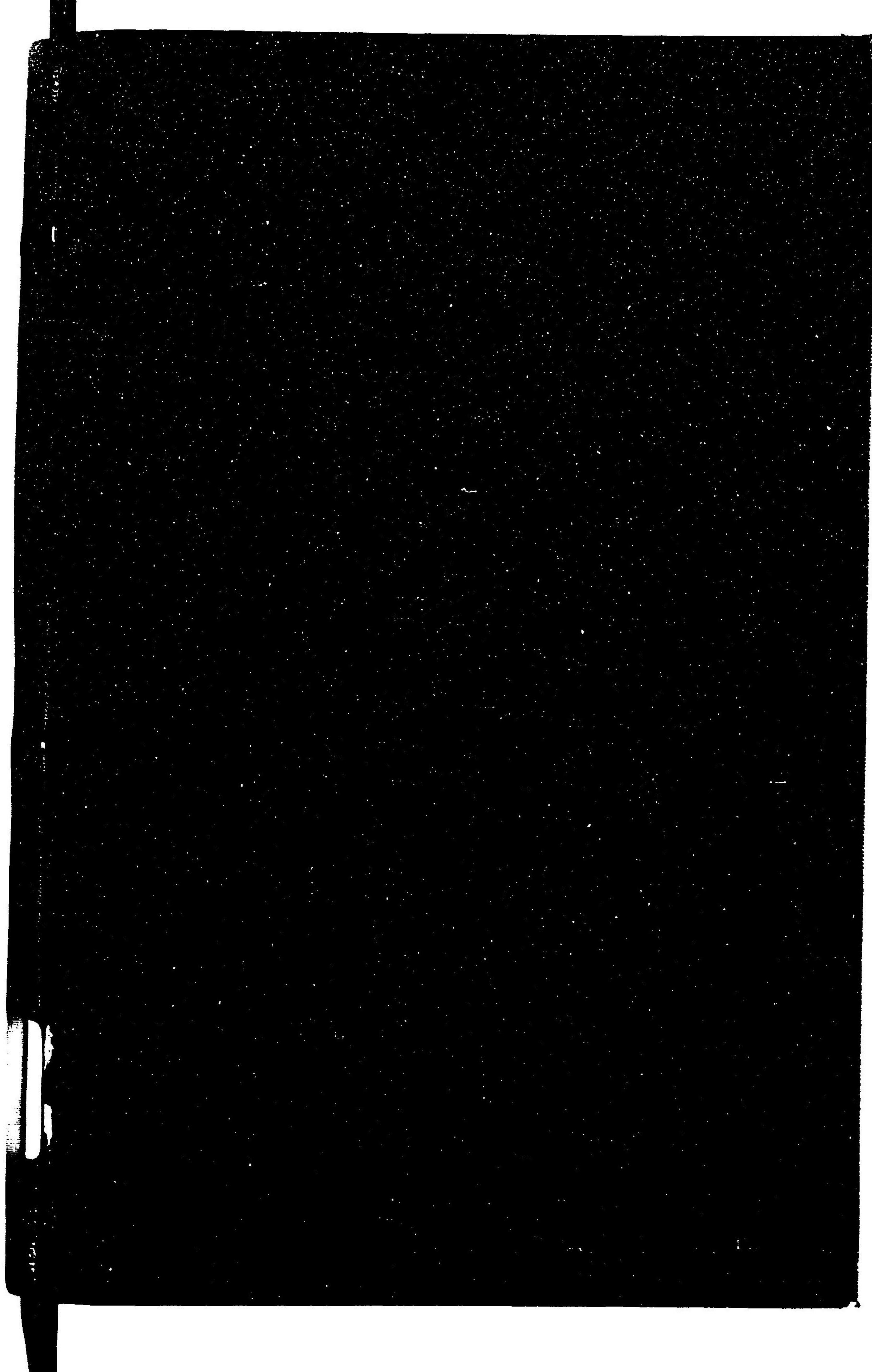
寶文館

(電話本局三三二三番)

賣捌所

東京堂 鴻盟社 森江文明堂 寶文館
東京市日本橋區本石町三丁目





79

483

019874-000-3

79-483

陽明と禪

里見 常次郎/著

M37.12

ABG-0706



